

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.83
2010.9

夏

特集 書物偏愛 二代目酒井九。朧堂

アダナ・プレスからi Padまで

酒井道夫……1

二代目酒井九。朧堂・酒井道夫に聞く

——いまこそ、本について語ろう……

7

二代目酒井九。朧堂、書架を語る

——『吾輩は猫である』異版展覧会……

15

国際図書展を通して見たサウジアラビア

浦山毅……25

●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム 番外編

酒井道夫……表2

大学出版部ニュース……30



一般社団法人大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

酒井道夫（二代目酒井九波堂）

私が普段たてこもるヒミツの巣窟を編集子に覗かれてしまったばかりに、今回の連載は番外編に切り替えられてしまった。混迷を極めるこの空間から、やく体もないフェティシズムがどう醸し出されてくるのか弁明しろということらしい。

「戦火に焼け出されて」という、かつての常套句は今やすっかり死語になってしまったが、私の幼少時には日常にありふれた会話のひとつだった。もう半世紀を遙かに超えた彼方のことだが、かく言う私自身が、家財の一切を焼き払われ、家族共々着の身着のままで戦後生活に投げ込まれた当事者でもあつた。目先に実在する「モノ」の全てに対する本能的な偏執は、この時点では植えつけられたのだろう。焼け出されて東京を後にする車中、唯一抱えていた絵本に描かれた山河の風景が頭の隅にまだ鮮明に残っている。恐らく『コドモノクニ』あたりのそれであろうが、確かめてはいない。

それでも再び巷が活気づき、新聞や雑誌に戦後著名人の書斎が紹介されると、万巻の書に取り囲まれてオツに構える彼等の姿に羨望を抱かないわけはなかつた。しかし自由になる金はない。無論書棚もない。ひたすらガマンの子であつたのが、二十歳を超えて、微々たる金額とはいえ自分の稼ぎを手にしてから後は歯止めが利かなくなつた。これでかかる後には一流書斎人の仲間入りいかと思いきや、そう上手くは話が進まない。

私の戦災体験は捨てるという行動を一切封印した。加えて、ほぼ無価値だと決めつけられた書物に対してことさらに愛着を持つ。結果、雑本の山がとめどもなく築きあがり、究極のつん読フエチに陥る。一九八五年頃からは、ワープロ、PCが新たに闖入しはじめ、これも最初期型からのモデルが捨てられなくて、この空間だけで十機を越える旧型PCが惰眠を貪りはじめた。

誇り高き書斎人への幻想は見事に打ち碎かれ、書物フエチのみがあからさまに露呈する日々。嗚呼、誰か「つん読アプリ」を開発してくれないかなー。



特集

書物偏愛 二代目酒井九ポ堂——モノとしての本の魅力をあますところなく語る好評連載「初版本、ナンセンスなフェティシズム」の著者にして、武蔵野美大退任後は二代目酒井九ポ堂を名乗る酒井道夫。古本屋巡りを生活の一部としながらも、iPadを発売初日に手に入れる温故知新の醉狂人が、自身の歴史を綴り、書物への愛を語る。電子書籍元年、我々は紙を愛するほどに電子を愛せるのか？

アダナ・プレスからiPadまで

めさせ、モリス！

私が出版印刷業界にかかわり始めたのは一九六〇年。同年代の編集者、デザイナー諸氏と比べて五年前後は早かつたろう。事情で、高卒編集者として世間に出てしまったからだ。そして文字組版との最初の出会いは、写植ではなく活版だった。以来、今日に至るまでのさまざまな流転経験はともかく、結局、私は半世紀に渡つてこの業界に生息して来たことになる。

駆け出しの業界誌編集者時代は、物好きと言われながら

制作の現場に足を踏み入れることが多かつた。当時の出版界では、編集と制作は互いに不可侵であることを暗黙の了解とする空気が支配的だったが、そのせいで時間的にも経費的にも不合理な事態が多々発生していたようと思う。そういうしている間に、編集と制作現場との間をちょっととした配慮をもつて調整することで、互いに気持ちよく、時間も経費も節減でき、しかも割付け等にも利することに気付いていた。

二〇代を建築、インテリア・デザイン関連の業界誌編集

酒井道夫



に携わりながら過ごした後、大阪万博と激しい大学紛争とが交差する一九七〇年の秋、ドサクサ紛れに美術短大の教員職に滑り込んだ。当時としては珍しく編集技能の講座をもつ新設学科だったのだが、この紛争で多くの在学生や教員が去り学科存亡の危機にさらされていた。幸い、万博以降に訪れた未曾有の好景気に支えられることもあり、学科の運営状況はすぐに好転。世紀の変り目までの三〇年間は、順調な運営が継続した。

七〇年以降の印刷業界は全てが写植を前提として回転していく、写植のQ数で平然と活版を指定している高名な「プロ」が跋扈していた。「切り貼り」だとか「詰め打ち」だとかいうオゾマシイ写植技術に馴染めず、写植にあからさまな反感を抱いていたにもかかわらず、若者を業界に誘う役を担つたのは皮肉でもあったが、その写植も、早くも八〇年代半ばには急激な退潮に陥つたのだから感慨を抱かざるを得ない。

学生指導の立場に立つた私だが、ここでも観念的な出版論をこね回す前に即物的な制作の現場を忘れないために、擬似的ではあるが身近に「実践的印刷工房」をもつのが得策でないかと考えた。幸い、頭を使うより先に体と手が動く美術学校生が相手であることは大いに助けになつた。こうして教員生活と平行して、出版印刷工房「酒井九ポ堂」は細々と継続してきた。私がイギリス製の卓上活版印刷機「アダナ・プレス」(図1)に出会つたのが、一九七二、三

年だったと思うから、かれこれ四〇年近い年月が経つてゐる。その間、電算、DTP、Netへとメディア環境が目まぐるしく流動化する状況に巻き込まれたが、この事態にもさほどの抵抗もなく対応できたのは現場主義のなせるところであろうか。

表向きの活版工房運営の背景は以上のようにだが、工房発足の直接的なきっかけは別にある。田舎の大学で自然科学の講座を担当していた父親が定年退職した際、退職教員のサガとしてお定まりの出版をしたいと言い出してつくつた簡易印刷・簡易製本の「本」なるものを見せられた。これに結構な額を支払つたと知つて驚いたのだが、さらに聞けば、彼は出版の甘い魅力に目覚めてしまいもう一冊出したいという。その金額をまた払うの？ モッタイナイから活版印刷機を買って自分で刷つたら？ どうせ暇なんでしょう？ これが、きっかけ。このために中古で清水製作所製の活版自動校正機（菊判四裁）を、我が印刷工房に新たに導入した。本文組は九ポ明朝だけに統一して、活字の在庫を極力限定する。他の書体やサイズの活字は、見出し以外



1. 今も酒井九ポ堂の工房内に鎮座するアダナ・プレス。もちろん、現役。

の箇所では原則として使わないと決めてスタートしたのが一九七五年頃のこと。さらに私の家内が、私と同じ美術学校の先生であり酒井九ボ堂の師匠にあたる横溝健志氏の夫人、紗緋子さんに製本の手ほどきをお願いして、覚束ないながら製本部門もスタートさせた。これで、かのウイリアム・モリスの故事に倣うプライベート・プレス体勢が一応整つた。

コッコツ組んで、八ページ組み上げたら表裏四ページずつを面付けして、両面を刷ったところで一端すべてを解版する。また新たに八ページ分を組み上げて表裏を刷る。この作業を何度も繰り返せばページ物ができるわけだ。この話を真に受けた父は、のっけから菊判二三〇ページ近くを三年費やして組上げ、自分の旅行記『初旅のヨーロッパ三週間』（一九七八）を刊行してしまつた（図2）。

は見当たらないようなウソ字があつたりする。木版時代なら、勝手気ままな創作文字でも彫師がたちどころに彫り上げてしまつていたというわけだ。これらのウソ字も、当時神田にあつた「東京活字店」に行くと「ちょっと待つてな。しばらく時間をつぶして、またおいで」と店主は言いおいして、自転車にまたがると何処かに行つてしまつ。しばらく置いて再訪すると、九ボ活字と同寸法のツゲの木に手彫りされた活字を手渡してくれると何処かに行つてしまつ。そんなウソのようなことがまだ可能な時代だったのだ。

復刻『中国料理の作り方百六十種』（山田政平著 一九八〇）

（二）もこの頃の刊行。著者は私の母方の祖母の弟に当たる支那料理人。この人が戦後すぐにラジオでお料理教室を始め、当時はちょっととした時の人がだつたようだ。

酒井九ボ堂の目玉刊行物

父が旅行記を完成させた頃のこと。当時、武蔵野美術大学で演劇学を担当させていた佐藤健一郎先生が、このままだと古い資料が散逸してしまふと嘆いていらつしやつた。じゃあその活字化と、同時に稀観文献の複数化にも寄与したのが『芸能誌料援遺一、二、三』（一九七九・一一一九八〇・八順次刊行 各限定一〇〇部）。

なにしろ相手が江戸時代の文献だから、ナマジな辞書に



2. 自動校正機に、組み上げた活版をセットする初代酒井九ボ堂（1978年頃）。

うに書き出されている。

「材料を粗末にするなとはいうだけ野暮である。食物を無駄にしない習慣は、無謀な戦争の唯一のプラスとして私達に残されました。しかし喉元すぎれば何とやらの喩もあり、ややもすればこれさえ手放す時がないとはいわれまい。」

この箇所にいたく感銘を受けて復刻を思ひたつた。結局何冊刊行したのかも忘れてしまつたが、勤務先のスタッフや学生であつた若いお嬢さん達が結婚する際に、記念として差し上げている間にあらかたはなくなつてしまつた。

活版からDTPへの迷走

酒井九ポ堂を始めたばかりの七〇年代のはじめ。活版自動校正機を個人の住宅に持ち込んで、終日ガチャガチャと何やら刷り物を制作しているらしい様子が注目を浴びたようだ。警察官の巡回回数がいやに増えたなーと思う期間が数年間は続いていたろうか。なにしろ、同じ市内の住民が卓上旋盤でゲンバクを製造していたとして検挙されるような時代だったから、地下出版を疑われても不思議はない。しかしワープロが出現すると、瞬く間に世の中が変わり、酒井九ポ堂の「活動」なんかたちまち見向きもされなくなつた。ゲンキンなものである。

アダナ・プレスを使っての年賀状制作は、一九七五年の干支である兎を文字組だけで描き出す他愛無い遊びから始

めて、次の年

は明治初期に

東の間流行つ

たといわれる

「野線画」の

マネ事に挑

戦。一九七七

年には「東京

活字店」で古

風な丸ゴチ書体を発見。

すぐさまこれに

「篆書系丸呉竹」

と勝手に命名して、この書体への偏愛にのめり込んでいく。

この珍奇な書体を沢山集めたいという気持ちが先に立つ本

末転倒な目的で、版面をやたらにぎつしり埋め尽くすショ

ーモナイ戯文を書き始め、その後どんどんと用儀の悪い文

面に傾いていった(図3)。

活版環境の雲行きがあやしくなり、酒井九ポ堂の事跡が迷走し始めるのは八〇年代に入つてから。一九八三年に一年間の海外滞在を終えて帰国したら、すでにワープロが身近な存在になりかけていた。当初、ワープロの価格は六〇〇万余で、アマチュアにはまったく関心外の代物だったのだが、帰国直後に秋葉原をうろついたら、その後継機が卓上型(トスワードJW-1)になつて家電店で売り出されて

いた。五、六〇万円だったと思う。私は車の更新をあきら

サン。此の場合撰られて

頭で「一般子女」の手首捕

りねり。何に使つて居た

自由の旗取出し、穴見得。

白由

講談なら「たけし」の方が

マネ事に挑

んて出来んと豫知連も

ワープロ岩説發せんと

賀

謹

3. 「篆書系丸呉竹」による1987年の年賀状の一部。

の縁が切れたままである。それから後はP.C.が更新されたりに、有り金が吸い上げられてしまうことになった。

ワープロ導入がすぐさま酒井九ボ堂に影響を及ぼしたとはいえないまでも、急速これで通信教育の教科書『編集計画』を編んで老眼が一気に進行したりもした。しかし、世は明らかに活版と移植を見切つて新しい航路を辿り始めた。以降、酒井九ボ堂は活版によるページ物制作への意欲を大幅に失っていく。世の中の状況がガラッと変わり、誰もがD.T.P.で気軽に文字情報を散布する時代になると、活版なんかでガチャガチャ、ガチャガチャやっていくことが全く意味をなさなくなってきた。

短大の学生さんたちと作った『デザインの構造研究』は、創刊号（一九八二）が活版、二号（一九九二）はPage Mak erのドット文字で出力。そして第三号（一九九四）はレーザープリンターを使った。文字通りの三号雑誌で、これ以降途絶えてしまつたが、一〇年間の三段跳び的な環境変転を如実に示す刊行物になつた。

年賀状制作のその後はというと、毎回、活字購入費だけで一、二万円を充てるという事態が続いていたが、一九八八年分を制作する目前になつて東京活字店が火災に見舞われ、そのまま突然の廃業。フツリと消息を絶つてしまつた。従つてこの年制作した年賀状は、入手不能になつた篆書体の代わりに明朝体の混植を余儀なくされた。

一九九〇年にはとうとうJ.W.-1によるドット出力（独特のタイプス風書体）を版下にして、プリントゴッコする無茶苦茶な状況に陥つていくのである。さらにその翌年からはMacのワープロソフトが縦書きに対応し始めたのを期に、実も蓋もない文面を臆面もなく明朝体に託し、皆様に送り届けるという愚挙を開始。二〇世紀最後の九九年に至つてレーザープリンターを導入したため版面は一挙に鮮明さを得たが、とうとうこれ以降は印刷とはいえないシロモノとなつた。

他愛無い遊びのつもりが、結局は大きな流転に飲み込まれた年月であった。巷の出版印刷事情も似たような状況で

『トランスクリティーケーク』
以後の思索の到達点

世界史の構造

柄谷行人

四六判 定価3675円

列伝体による中世哲学総論

中世の哲学

今道友信

A5判 定価11, 550円

新たな心の座標を求めて——
経験・自覚・言語

対談評訳

イエスの言葉／ 禅の言葉

上田閑照, 八木誠一

四六判 定価3150円

ローマ書の解釈史から
国家と宗教の根源に迫る

国家と宗教

—ローマ書十三章解釈史=—
影響史の研究

宮田光雄

A5判 定価9240円

孔子は本当は何を語ったか

思想史家が 読む論語

—「学び」の復権—

子安宣邦

四六判 定価3360円

 岩波書店
（東京・千代田・一つ橋
（定価は消費税5%込み）
<http://www.iwanami.co.jp/>

はなかつたろうか？二〇〇三年以降は、レーザーライター出力に適合した不思議な篆書体「吟」を見つけ出した。これがまた異常なまでに凝ったデザインなのでほとんど解読不能。これ幸いと更に不遜な文面を各方面に配布するところになった。本年のリタイアを期に、この行儀の悪い所行にも終止符を打ちたいと考えているが、どうなることやら。

iPadを手に思うこと

さて、私は発売当日にiPadを入手した。本来からいえば、私は九〇年代の当初からeInkの帰趨に注目し、期待もしていたにもかかわらず、この開発は予想外に困難に遭遇している模様だ。費やされた時間と手間は、かつてのゲーテンベルク革命がもたらした技術改革に比べてもそうとうなものではないか。eInkの開発がもう少し順調に進んでいて、加えて我が国の出版界の対応が賢明だったならば、私はもっと早くKindleやReaderに手を出していたに違いないが、とうとうiPadに寄り道。それでも私はeInkの将来性に期待するところ大きなのが、ここ当分はiPadの草刈り場として甘んずることになるのだろう。

紙への偏執が、書物メディア安泰の確固たる砦だとする言辞が、まことしやかにまかり通っている様子だが果たしてそうなのか？海島綿や黄八丈の衣類を着用するとかいつたハイエンドな嗜好と同程度な次元において、私は紙の

書籍愛好を支持するが、だからといって、その風合いや使い勝手が書物の存続を永遠に保証するものとは思わない。

iPadの登場は、雑誌メディアのあり方を根底から問いかけています。学術書はどうなのか？私は試みに、このつなない論説をちょっとだけ

iPadに載せてみた（図4）。新たな制作費はダウンロードソフトの購入代金七〇〇円ポッキリ。アタシの定年記念出版？私の現在の知恵をもってしては縦書き対応の検索が掛けられないのが残念だが、早晚それも可能になろう。加えて、いま私は日に何度もツイッター旋風を眺める日々である。蟻の行列が行き交いざま触角を触れ合わせて瞬時に情報を交換するだけで、その社会を構成しているらしいことを改めて考えてしまう。鳥のサエズリもこれと同じか！私たちもまた、サエズリの交換で社会を形成する未知なる文明に遭遇しつつあるのだろうか？



4. この文章もiPadであつという間に書籍の体裁に。

いまこそ、本について語ろう

「酒井九ポ堂」とは？

——この春に武蔵野美術大学を退任せられ、いまは悠々自適の毎日かと思いますが（笑）、今後はどうなさるのでしょうか。

あと一〇年ぐらいは普通に生きていた

いですね。いろいろな人に「おまえこれから何するんだ?」「のうのうとしていいのか」などと言われるので、「いや、竹の子掘り爺さんになるんだ」とか言い返しているのですが（笑）。

それは冗談として、実はあと一〇年のあいだに紙の本を作りたいんです。例えば、明治時代の文芸書で挿絵のすごくいい本がありますが、そいつたものを再現して紙の束にする。モノとしての本つてこうじやなきやいかんだろ！というような本、どうしても持っていたいと思わ

せる本、をいくつか作ってみたいのです。それは大きな出版社にお願いして作るのではなく、自分で、まさに九ポ堂で。

僕は二代目九ポ堂を名乗っていますが、息子が三代目として編集事務所（<http://www.kyupodo.com/>）を開いて活動を始めましたので、そのフィールドを借りてやりたいですね。

全体の状況としては、電子書籍の時代に移っていくでしょう。メディアの大勢はそのようにシフトしていますが、その影響たるや、単に電子書籍という「媒体」の問題にとどまらず、近代が構築した思想の構造そのものが、おそらく総崩れになるだろうとみています。でも、「紙の本はこうですよ」と言えるものを作と一〇年ぐらいでやつてみたいというのが本音なんです。電子書籍を手掛ける人はいっぱい出てくるでしょうからそこは人様にお任せして、自分としては紙の本を

いくつか作って、それで人生締めくくりたいですね。

——その「酒井九ポ堂」についてお聞きしたいのですが、先生の現在の肩書は、「武蔵野美術大学名誉教授」ではなく「二



代目酒井九ポ堂」ですよね。この「二代目酒井九ポ堂」とは何なのでしょうか。

特集に掲載されるほかの記事「アダナ・プレスから i Pad まで」のなかにも書きましたが、九ポ堂は親父が立ち上げたものです。学者であつた親父が退職し、自分の本を出すために活版印刷機を買って、自分で組版して、自分で印刷。製本して本を作ったのがはじまりです。親父が初代で、僕が二代目、息子が三代目です。

——書き手が原稿を書くにとどまらず、本まで作ってしまうというのは、非常に珍しいですね。

一九世紀末から一九三〇年ぐらいのあたりに、イギリスを中心にして歐米でブライベート・プレスというのが流行りましたが、あれがまさにそうですね。日本では流行らなかつたんですが、それを僕はやりたいな、と。

——なぜ日本では流行らなかつたのでしょうか。

それは文字数でしょう。和文は、最少

限でも七〇〇字ぐらいの活字を用意ないと普通には組めない。英文は A～Z の大文字小文字で組める世界ですから、その差があまりにも大きすぎて、できなかつたと思うんですね。それを敢えてやろうとしたのが九ポ堂。

——以前に九ポ堂が復刻として刊行した、『中国料理の作り方百六十種』（山田政平著、一九八〇）などは立派な出来栄えですが、実際におやりになつてみて、いかがですか。

これは親父が定年で暇だからやれたんですよ。僕自身、今まで年賀状や小冊子は作りましたけど、数百ページにもなる本の組版まではできなかつたですね。これからやりたいと思っていますが。

——組版から製本まで、すべてお父様がなさつたのですか。

製本は僕のかみさんの担当でしたね。組むのは親父。印刷は力が要るから僕もやっていましたが、製本は彼女が糸でかがつていました。

本へのフェティシズム

——『大学出版』の連載で珍本を含む所蔵本を紹介してくださり、また今回の特集にもあるように『吾輩は猫である』の様々なバリエーションの収集もなさっていますが、モノとしての本への愛着、そして収集のきっかけは、やはり九ポ堂の活動だつたのでしょうか。

親父が九ポ堂をはじめるのは僕が大学教員になつた頃ですが、収集はともかく、モノとしての本に興味を持ったのは、大學に勤め始める前の時期ですね。つまり、僕が高卒後の浪人中に勉強する意欲を全く失つて（笑）、あるインテリア・デザイン事務所に就職してからです。そこでは工芸関係の学会誌を作つていたんだけど、「おまえは図面が引けるわけでもないから、編集のほうをやれ」と言われて、実際に原稿を扱つたり、浅草橋にあつた小さな印刷屋に出入りして活版を見たりして、編集に携わつていてるなかで急激に興味を持つたんです。ちょうど二十歳のとき。

——とはいって、お父様が学者ですから、

幼少の頃から本に囲まれて育ったのでは
ないですか。

いや、僕の小さい頃は戦争の時代で、
親父は戦災ですべてを失つたんです。引
越しの途中で、家財を乗せた列車が直撃
されて一切を失つた。僕が小学生になる
直前の頃です。だから自分で実際本を集
められるようになつたのは、大学を出て
からです。それまでは古本屋に行つても
背を見ているだけ。子供の頃はおこづか
いで買える程度のものは買いましたが、
その恨みみたいなものが、給料をもらう
ようになると爆発的に出たのかもしれません
(笑)。

戦争で何もかも失つて、親父の田舎に
帰つてお医者さんの家に間借り生活をし
て、そこの六畳一間で一家全員が暮らし
ていた。その隣の部屋が開かずの間みた
いや、僕の小さい頃は戦争の時代で、
親父は戦災ですべてを失つたんです。引
越しの途中で、家財を乗せた列車が直撃
されて一切を失つた。僕が小学生になる
直前の頃です。だから自分で実際本を集
められるようになつたのは、大学を出て
からです。それまでは古本屋に行つても
背を見ているだけ。子供の頃はおこづか
いで買える程度のものは買いましたが、
その恨みみたいなものが、給料をもらう
ようになると爆発的に出たのかもしれません
(笑)。

大きくなつてモノとしての本に愛着を
抱いたり集めるようになつたのは、小さ
い頃に徹底的な欠乏生活にいたという單
純な理由からじゃないかな。ゆつたりと
書庫があつて、おじいちゃんの本もおと
うさんの本もいっぱいあつて、という環
境で育つたんだつたら、僕も観念的な人
物(笑)になつたかもしれないけど、な
んせ欠乏しているところに、えつ、すご
いリッチな世界があるんだなーというこ
とで、非常な驚きの経験がその後に影響
したのかもしれません。



なぜ都は、転々と
遷つていったのか。

古代の都

全3巻
各2,940円

平城京の時代

(第1回) 田辺征夫
編

平城遷都
1300年 首都
仏都 国際都市...
奈良の都のすべて。

(続刊) ①飛鳥から藤原京へ ②恒久の都
平安京 (内容案内送呈)

日本の 対外関係

全7巻

荒野泰典
石井正敏
村井草介
編

日本国号の歴史

○倭寇と「日本國王」
13~15世紀 九〇〇年続いた伝
統的外交を...室町将軍はなぜ放棄
したのか。
(第2回) 6300円

●東アジア世界の成立
細文社
前代~5の世紀 第1回
小林敏男著 なぜ、この国
は「日本」というのか。意味
由来を探る。
1785円

吉川弘文館

東京都文京区本郷7丁目2番8号
電話 03-3813-9151(価格税込)

——古本屋巡りにのめり込むようになつたのは、いつ頃からですか。

高校生の頃から古本屋を覗いて文庫を買うことはありました。のめり込むようになつたのは、雑誌の編集をやりはじめて印刷屋と付き合う頃からでしょう。とにかく下積みって大変なんです。高卒でこの世界に入つてしまつたら、そこから這い上がるつてものすごく大変です。だから高卒で頑張っている人をいまでも尊敬している。南伸坊さんとか、結構いるよね。

だから、これではたまらんと思つて大学に入りました。大学に入ると、今度は時間はいくらでもあるんですよ。夜学に行つてたから、時々編集の手伝いをさせられることはあっても、基本的には暇。その代わり金はない。だから、神田には一日に何度も往復するぐらい行つたり来たりした。平台に詳しかったですね。僕らが学生の頃は、汚い本（ボール表紙本）が平台にドカーンと出ていた。さすがの僕も、なんだこの汚い本は（笑）。と。それを買う金もなかつたけど（笑）。その汚い本が何なつかを知ろうとは思わなかつた。あの当時、国文学専攻の人たちにとつても、一番価値のないものだつた

んですね。古本屋だつて誰も買いたがらない。しようがないから平台に入れておく。そこで誰が買い漁つたかというと、

おそらく、今まで言えば東大のロバート・キヤンベルさんの、少し前の世代の米国人たちでしよう。キヤンベルさんもそのあたりの事情をよく知つていると思うけど、あのへんの資料は、みんなアメリカへ行つちゃつた、と噂になりました。日本でも系統的にきちんと研究・分析すべきだと気が付いたときには、もうなかつたという状況じやないかなあ。

——彼らにはその価値が分かつていたのでしょうか。

——もともと、いたものにすごい値段が付いているからね。

『タウトが撮つたニッポン』

——モノに即すということでは、先生の共編著『タウトが撮つたニッポン』（武蔵野美術大学出版局、二〇〇七）にも通底するモチーフです。岩波書店ながらく眠つていた写真アルバムには一四〇〇点の資料があつたということですが、そこから絞りに絞つて一三〇点を掲載するという編集作業は、大変な労力を費やしたかと思います。

もともとは、がつちりしたタウト研究として、学術書として出すことをイメージしてたんだけどね（笑）。原稿自体は随分前に編集者に渡してお蔵入りされたんだけど（笑）、ある日突然、ワタリウム美術館でタウト展覧会があるのでそれに合わせて出版したいって相談があつた。僕はもともと書籍じゃなく雑誌の編集者でしたから、タイミング外したらダメだつて身体が覚えていて、二ヶ月で無理やり作ったね。ただ、いつの間にか路線変更されて、出来上がつたものは教養

書になつちやつた（笑）。売れたからいいんだけどさ（笑）。

本のなかの日記部分はオリジナルの翻訳（担当・沢良子）。だから、すでに岩波書店で出ている篠田英雄さんの翻訳とはかなり違っています。篠田さんは、非常に日本語が堪能な教養人。豊かな教養があると流暢な日本語になりすぎると思つて、もう少しボキボキした日本語にしました。

——この本は、日本で知られている建築家としてのタウトとは別の側面に光を当

てたわけですが、日本の日常景色を撮影したタウトに焦点を当てた狙いは何だつたのでしょうか。

タウトというのは、特に日本人のなかでは神格化されてしまっている。だから、神格化された像に寄りかかって仕事をしろあまり見せない方が良いと考える方も多いと思います。もともと、これはタウトだけではなく、日本とヨーロッパの関係のなかでは、神格化されている人物がほかにもいます。

ただ、タウト資料には実に生々しい手紙や、こんなことまで知つてしまつてい

りの、なぜあんなものまで残したんだろう、というようなものまである。僕は残さないようにしないといけない（笑）、いやあまり意味ある資料もないけれども（笑）、という状況のなかで、タウトは知られているよりも広い視野で日本と出会つていたことを示していると思います。タウトの神格化を敢えて崩すということ以前に、タウトはもつと多様に、こんな眼で日本を見ていたことを知つてほしいという気持ちでの本を作つたし、その気持ちはいまでもあります。

その点は、モノとしての本のあれこれを示す『大学出版』での連載でも、ある意味同じです。物事を抽象的・觀念的に捉えるのが上等の読者と思われている雰囲気のなかで、モノが最初にあって、そこから觀念が生まれるんだよ、ということを繰り返し言いたいわけです。

——その、神格化されたタウト像に再考を迫るという先生の狙いは、読者に伝わりましたか？

タウトが撮ったニッポン

BRUNO TAUT
A Photo Diary in Japan



酒井道夫・沢良子 編

武蔵野美術大学出版局

タウトがどのような眼で、どのように行動したかということについて、ちゃんと読み込んでないじやんという感じもありました（笑）。そういう意味で言うと、僕は通信教育で『印刷文化論』（武蔵野美術大学出版局、二〇〇二）を教科書にしていました（笑）。その意味で、僕はこのテキストだけが頼りなんです。それでレポートがくるでしょう。そうすると、あなた読み方が違うでしょ、僕はこんなこと書いていませんよ、もう一度読み返しなさい、と突っ返すんですよ。

こんな著者と読者との関係は、普通の本ではあり得ないんですよ。教科書でないものは、買ってくださればありがたい、どう読むかはあなたの自由です、となるわけですから。

だけど、大学出版部協会の本は、教科

書を出版している以上、必ずコアな部分はそういう関係で成立しているわけでしょう。これは強いと思うね。

『吾輩は猫である』の世界

——モノとしての本という点では、今回の特集でも『吾輩は猫である』異版誌上展覧会として、本の世界の多様性を披露されています。デザイナーの祖父江慎さんは、同じく漱石『坊っちゃん』の異版収集家でもあり、『坊っちゃん文字組101年』なども刊行されていますが、先生はいつ頃から収集を始めたのでしょうか。

僕は一九七五年くらいからやつているかな。祖父江さんがいつからやつていたか知らないけど、僕の方が早いんじゃないかな。というのは、こっちが年寄りだからってことだけだ。

——先生の場合、どうして『猫』なのですか。

『坊っちゃん』でもいいんだろうし、『坊っちゃん』は確かに面白いけれど、それはストーリーの面白さであって、『猫』

の面白さは何かわけの分からぬところかな。

『坊っちゃん』については詳しく知りませんが、初版の『猫』は組版が相当変わってる。不思議な組版ですね。いまやろうとしても再現できないような、無茶

苦茶な組版です。それは、当時の編集者・出版社の関与の度合いや主体性の程度を映し出しているとも言えるんだけど、校正なども非常に難駁です。その後だんだん積極的に出版社がかかわりはじめることで、例えば小宮豊隆が不統一な部分を全部整理してしまう。僕はやりすぎだと思うんだけどね。

というのは、出版社が主体性を發揮し整理することで、『猫』に関して漱石が当初狙っていた落語みたいな語りの面白さが消えていくわけです。もともと『猫』は朗読のための作品ですから、そういうのが非常に濃厚だった。いろいろなところに行つて朗読していたものの記録らしい。それが話題になり、面白おかしく語られていたと思う。落語の口調で語ったんじゃないかな。

——だからこそ、いろいろなバリジョン作品は他の作家に比して多くの異版が出廻っていたのでしょうか。



そう。彼は気難しいとか、偉そうだけのことばかり言われているけど、軽妙洒脱なところがあつた人のような気がします。下町の人ですから。

——だからこそ、いろいろなバリジョンがあるということですね。

力チンの森

ポーランド指導階級の抹殺

ザスラフスキイ ソ連は1940年
秘かに将校22000人を虐殺、連
合国も隠蔽に加担。初めて明か
される真相。根岸隆夫訳 ¥2940

大気を変える鍊金術

ハーバー、ボッシュと
化学の世紀

ハイガー 窒素資源を人の手で
つくりだす大発明が、生物圈を
変容させ産業と戦争を駆動した
戦慄の歴史。渡会圭子訳 ¥3570

生物多様性(喪失)の真実

熱帯雨林破壊の
ボリティカル・エコロジー

ヴァンダーミニア他 ボリティ
カル・エコロジー入門。熱帯雨
林破壊の原因ネットワークを多
角的に描く。新島義昭訳 ¥2940

性同一性障害

児童期・青年期の問題と理解

ズッカー／ブラッドレー 子ども
の事例を中心に、あらゆる角度
からその全貌に迫る。待望の本
格的概論。鈴木國文他訳 ¥7980

死の欲動)と現代思想

デュフレーヌ 精神分析は死ん
だのか。フロイトを同時代の知
的文脈に置き、追随者らの無理
解を抉出。遠藤不人訳 ¥5040

認識問題¹

近代の哲学と科学における

カッシーラー クザヌスからガ
リレオ、デカルト、パスカルまで
近代の誕生を精緻に跡づける壯
大な思想史。須田朗他訳 ¥8400

東京文京本郷 みすず書房

5丁目32-21 tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)
<http://www.msz.co.jp>

——『五日輩は猫である』異版をめぐるド
ラマは、同時にモノとしての、紙の本を
本はヨリへ行くのか

いっぱい持っていた作品でしょうね。パ
ロディがどのくらい出でているかをネット
でリスト・アップしている人がいたけれど、二〇〇種類を越えるぐらいあるらしい
（<http://homepage3.nifty.com/nada/page042html>）。

そういう意味では、変容しうる要素を
きちんと検証できてはいませんが、そ
うだと思います。『猫』に関してはすご
く早い時期にパロディも出ているんですね。猫が生き返ってどうだったかとか、パ
ロディがいっぱい出てくるんですよ。

きちんと検証できてはいませんが、そ
うだと思います。『猫』に関してはすご
く早い時期にパロディも出ているんですね。猫が生き返ってどうだったかとか、パ
ロディがいっぱい出てくるんですよ。

めぐるドラマでもありました。一方で、
先生はiPadを発売初日に入手され、
新しいメディアも駆使されているわけで
すが、実際にiPadをお使いになり、
本の未来をどのように感じているので
しょうか。

——そういう大きな状況変化のなかで、
編集あるいは編集者に求められている役
割は何でしょうか。

好むと好まざるとにかかわらず、本は
電子化していくのではないかな。好きだ
から電子化に行くというのではなく、事
態がそつちにすべり出してしまっている
からね。その代わり覚悟しなければいけ
ないのは、近代の様相が次のモードに切
り替わっていくことでしょう。

その先には怖い事態が待っていると思
いますね。人間の尊厳、個人の尊厳が侵
されることぐらいまで覚悟しておかないと。
自分が「尊厳ある個人」として頑張つ
ていきたい人は、紙の書籍にかかわって

電子書籍では執筆者自らが出版までこ
ぎつけることもできるわけですから、い
きおい編集者不要論も出てくるけど、い
ままで意識されていたか否かにかかわら
ず、編集および編集者が担っていた役割
はすごく大きかったと思う。

——どうせいこう君が武蔵美に教えに來
てくれたとき、女子学生が「編集つて何
ですか?」とダイレクトに聞いたんです。
それに対するいとう君の答えは、「実は
あんたもすでに編集を経験している」
というものだった。彼は、「例えば、あ

いたほうがいいんじゃないかな。その代わ
り、置いてきぼりにされると思うけど。

なたにボーグフレンドができたとき、それをお父さんに報告するのと、お母さんに報告するのと、あるいは友だちに言うのと、同じ言い方をしますか?』と逆に

問い合わせたのです。学生はだいぶ考えた

挙句、「それぞれに考えて、細工して言

います」と。彼は「それが編集ですよ」

と言つていました。なるほど、うまい

説明ですね。

出版の編集に関する世に問う以上、

言いたいことを誰に対し、どのように伝

えるか、考え方しながら加工していくか

なくてはならないでしょうから、それが

不得意な人や、あまり上手くない箇所に

ついてはそれを手伝う人が、あるいは見

どころをさらに引き出して良いものに演

出する専門的な立場の人がある、当然必要で

しょう。

——逆に言うと、書き手がダイレクトに情報発信できる時代では、充分な編集がなされない未熟な作品と、従来型の、職業編集者を介することで完成度を高められた作品と、この両方の違いが露わになるかもしれません。そのコントラストのなかで、編集者の役割が再認識されるとも出てくるのではないでしょうか。

そうですね。最近刊行された『編集者の仕事』(柴田光滋著、新潮新書、二〇一〇年)を読んで面白いと思いました。

僕たちはややもすると校正の重要性を忘

れがちですし、最近は校正が不充分な本

が多い。

僕も校正が非常に不得意なのですが(笑)、特に著者校正に任せてしまっていつもになりますよ(笑)。そのあたり、

編集者あるいは校正者がどのようにかかわるのか、きちんとした文章を世の中に

送り出していくには、充分に心掛けてい

ないと変な文章がいっぱい出てきてしま

うと思いますね。

きちんと対価を支払うようにする必要があるでしょう。

——九波堂の今後の活動の柱は本作りということですが、今までの活動の柱であつた年賀状作りはどうなりますか?

年賀状は、あの世の中をおちよくつ

ような文章はもうやめようやめようと思

いながらずっとやつてきたんですよ。

田村義也さんがいけないんだよ。一回

やめたことはあるんだよね。そうしたら、

「うーん。やめたか。安田武もこんなよ

うな変なことをやつてたんだよな。やめ

たらすぐ死んだ」と言うから、やめられ

なくなつちゃった(笑)。

——さきほどのお話では、九波堂は本作りの再開を目指すということですから、校正についても注意を払うということですね。

(聞き手・構成 東京大学出版会・山田秀樹)



『吾輩は猫である』異版展覧会



夏目漱石著『吾輩は猫である』の、多様な刊本を集め出した動機は何だったのか？さほどのことでもないのだが、結果は、書物刊行に伴う様々な諸相を垣間見ることになった。他愛無い收集癖も案外にフカイところを探り当てるモンダ、などと勝手に納得している。その収集の一端を今回お目にかけるが、やっぱり他愛無いだけではないかとお怒りの向きには、ご容赦を願うしかない。

「猫」は、初め『ホトトギス』誌上に登場して以来（一九〇五）、今日に及ぶまでに夥しい異版を数えている。当初の「猫」は「誤字脱字小説」ともいった趣があり、江戸っ子漱石の俳味あふれるノリで生み出した作物だが、そのあまりに鷹揚な用字用語法はその後の「定本化」を極めて困難にし、多くのバリエーションを生じさせることになった。これにパロディのよろな刊行物、あるいは映画、TVドラマ、アニメに脚色されて発表された諸作品などを加えれば、優に数百を数えるかもしれない。名作、怪作、珍作がひしめき合っているが、その全貌を視野に納めるのは困難である。今回この披露以上にお前は膨大な収集を誇つてゐるのではないか？と問われても片腹痛いものがある。収集とは、視点を変えれば駄物の山を築くことでもあるのだ。

吾輩ハ猫デアル 上・中・下

大倉書店・服部書店

一九〇五—〇七（明治三八—四〇）

本誌七六号の連載コラムで『猫』を扱つた当時、私の手元にあつたのは「復刻版」

作家の永井研治さんにお見せしたところ、「これは制作当初からの汚れです」とのことだつた。好評に追いまくられて粗製本を濫造したらしいことが推測できるのは面白いではないか。そういえば、刷り誤りをそのまま使つたと思われるペジもある。

この本の造本が、いかに珍妙なものであるかは先に語つたのだが、その最大の特徴を再び挙げれば、本文の中身が小口側に一センチばかりはみ出してしまつてゐること。普通のハードカバーでは、中身の本文より表紙を数ミリ大きくして（チリ）、それで本体を保護するが、表紙をこんなに寸詰まりにしてしまつては意味がない。

案の定、今回入手した三巻本は全体がヘタつてゐるところに加えて、小口からはみ出した中身の角がすっかり摩滅して丸くなつてゐる。かなり播読が重ねられた結果だが、本の表紙が果たす役割は結構大きいことを改めて知らされる。

ここでは本書の組版について言つておきたい。この当時の書物では、版面を五号活字を用いて四分アキの字詰めで組む方式がしきりに用いられていた。句読点やカッコ等の込物も四分相当の字間に納めるので、文字の縦横の並びが基盤の目

からほほ一年後に出た第八版なのだが、巻頭の挿画がかなり汚れている。当初、これは所有者が播読時に付けたインクのシミなんだろうと推測したのだが、版画

のようによつているのが大きな特徴。この四分アキをうまく生かして「御め、へのう・ちの主人を見ねえ」なんて江戸弁の口調を巧みに書き表したりしているところは見逃せない。ベタ組を標準とする今日の組み方では表記し辛い処理をしているわけだが、『猫』はもともと漱石自身の語りによる口演が好評を得て、それを活字化したものと言われるだけに、音声のリズムをそのまま伝えようとする工夫が感じられるらしいか？

また今日の『猫』各書では、ワタクシを「吾輩」と表記するのが当たり前だと思われているが、意外と「我輩、余輩、余等も多用していく、後の全集に収録する際にこれら全てを「吾輩」に統一したもののらしい。これは随分積極的な校閲姿勢なわけだが、果たしてそれでいいのか？

初版では「我輩」の方が多く使われてゐるとも言う。この単語の使い分けは、あまり意識的なものではなくたともされるが、それだけに口演時の気分的なノリに従つてままに表記が流れ動いているわけで、これを一律に整理してしまうことで、失われた「漱石の気分」は、無視できない問題ではないのか。普段の会話の中で、「私、自分、俺、僕」等、かなり揺れ動くのは私だけの癖ではあるまい。



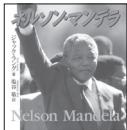
ネルソン・マンデラ

ジャック・ラング著
塩谷敬訳

27年間の獄中生活を乗り越え
「全民族融和の象徴」となった
反アパルトヘイトの闘士の評伝

フランスの政治家であるラング
がぎわめて独創的な視点から
取り組んだマンデラ評伝。「人間
が、本来の目的である『他者による
抑圧と闘う』ために克服し、
解決したはずの内的矛盾を見
事にあけき出しているのである」

—N.ゴーディマー
◆2730円



現代の
公共哲学と
ヘーゲル

Nelson Mandela

著　ジャック・ラング

翻訳　塩谷敬訳

発行　筑摩書房

定価　2730円

著　Wilhelm Friedrich Hegel
翻訳　福吉勝男

現代の 公共哲学と ヘーゲル

福吉勝男著

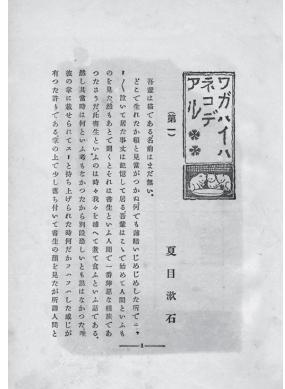
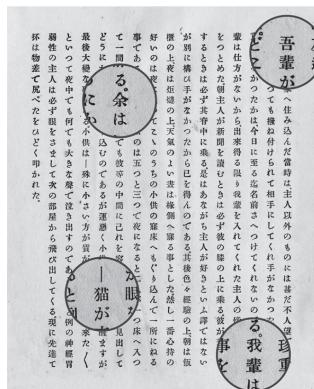
ヘーゲルが遺した
これからの福祉社会論

国家権力と闘い、国民の自由を擁護した進歩的哲学者としてヘーゲルを読みなおす試み。公共哲学における伝統的三項論「私—公共—公」を、「去権利の哲学」を媒介に「市場—市民社会—国家」へと転換し、さらには「自助—共助—公助」からなる福祉モデルへと拡張するヘーゲル研究の新展開。

◆3360円

未来社 〒112-0002
東京都文京区小石川3-7-2
tel 03-3814-5521
<http://www.miraisha.co.jp/>

★出版図書目録無料進呈いたします★
※価格は税込



上段：大倉書店・服部書店版の本物。ジャケットがない、第一巻の背が壊れているなど難もあるが、本物だけがもつ雰囲気は十分。

中段右：第一巻本文冒頭の版面。

中段左：「吾輩」「我輩」「余」の混在に注目。ルビは全く付されていない。

下段：小口のはみ出しの謎は永遠か？

『寸珍 吾輩ハ猫デアル』

大倉書店 一九一一年（明治四四年）

「寸珍」とは珍な語だが、私が所持する版は一九一九年九月刊の第五八版（初版は一九一一）である。八、九年の間にこれだけの版を重ねたのだから、相当なベストセラーだったわけだ。柿渋紙を用いた垂れ革装（本革使用のも存在するらしいが未見）。普通、垂れ革装は立派な聖書などに見受けられる製本方式。聖書は他の雑書と一緒取り混ぜて書棚に立て並べて置くべきものではなく、一冊だけを家中で一番神聖な場所に恭しく横置きし奉るもの。かかるに天金どころか、小口のすべてに金箔をほどこす三方金に装う。こうしてこそ、どの方角から崇めてもアリガタイ聖書に相応しい姿になる。加えて四辺に豪華な総飾りを付けたりもする。

ところがこの『寸珍版猫』は三方金ではなく天金のみが施され、しかもタイトな外函に収納されているので、せっかくの垂れ表紙に強い折ぐせがついてしまつて繙書の邪魔になる。やはりこれも「一寸珍なる造本」だと言わざるを得ず、ここにも見よう見まねの文明開化の風を感じます。

じるが、私はこんな漱石のミーハーな新奇好みを好ましく思つ。

この寸珍版は三五判で、七五〇ページに上・中・下巻分を全部納めているが、多くの読者を獲得してきたはず。本文の組版は六号ベタ組でところどころにルビを配している。「吾輩」についてもこの段階で少し整理した形跡があるが、後の全集版ほどに徹底したものではなく、相変わらず「吾、我、余」が混在している。



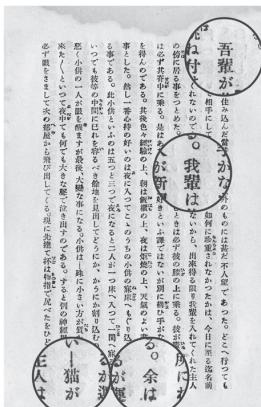
中段：なぜ背後に見える外函に納められることになったのか？ 柿渋紙を用いたせっかくの垂れ表紙にも強い折ぐせが。本体の下が、本来の垂れ革装、三方金で飾られた聖書。

下段右：一部にルビが付された。

下段左：「吾輩」「我輩」「余」の混在は初版同様。



吾輩は猫である。名前はまだ無い。
どこで生れたか頗る見當がつかぬ
は記憶して居る。吾輩はここで始め
ふ人間で一番穢惡な種族であつたさ
である。然し其當時は何といふ考も





り遙か以前に獲得していたわけだ。捺れ現象?

漱石人気が今日あることと岩波版漱石全集の関係は切つても切れない。最初の漱石全集は、漱石没後七年目の一九二四年九月。編集発行元を漱石全集刊行会として、その代表者が岩波茂雄。判型は、

最初のが菊判。その後、昭和の初めに円本として企画された全集が四六判だったが、岩波書店は今日でもこの二系統をほぼ並行して間断なく刊行し続け、この問、新書判や文庫判でも刊行してきた。

この岩波版漱石全集は我が国における個人文学全集のスタンダードを築いたものと自負し、またそのように喧伝されてきたが、「吾輩」問題ではかなり積極的に強引だったと言っても良い。しかもなぜ総ルビなのか?

ところで、一九九三年に刊行開始された四六判の漱石全集からは、忽然と定本回帰を謳い始めた。総ルビをやめて、「吾輩、我輩、余輩、余」もすべて元原稿に倣つて復したというのだ。これで岩波版漱石全集は名実共に規範的存在となつたわけだが、しかし、権威的立場はそれよ

り遙か以前に獲得していたわけだ。捺れ現象? 校閲問題等にあまり深入りするとケガをするので、ここから先はご専門の先生方にお任せするしかないが、岩波の漱石全集刊行歴にはなかなか劇的な経緯も伴っていた。文庫判と、角背四六判による全集の同時刊行(一九四七)は、

一九四六年九月より著作権者夏目純一、編纂者夏目伸六として刊行開始した明治文学刊行会(桜菊書院内)発行の『夏目漱石全集』に対抗して、版権所有を主張するため、明治文学刊行会は、元原稿から起こしたものでないことが明白。版権問題としては妙なところで弱みを曝け出している。

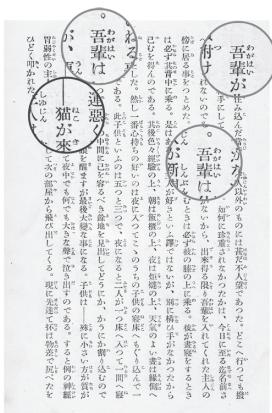
するために急遽敢行されたものらしい。ただ、桜菊書院版における「吾輩」問題をチエツクしてみると、当初の岩波版漱石全集の処理にそのまま従つており、元原稿から起こしたものでないことが明白。版権問題としては妙なところで弱みを曝け出している。



中段：繰り返し出版されてきた、岩波版漱石全集。

下段右：「吾輩」に統一され、総ルビが採用された。

下段左：岩波を憚てさせはしたがライバルにはなりきれなかった桜菊書院版。



『現代日本文学全集19』

改造社

一九二七(昭和二)

『新選夏目漱石集』

改造社

一九二九(昭和四)



→上段：奥が杉浦非水による装丁の『現代日本文学全集』(右本体、左外函)。手前が実に味気ない『新選夏目漱石集』。
下段右：非水装丁本の版面。
下段左：『新選』の版面。

←中段右：表紙。

中段左：全編、浩一路によるリライトテキストと漫画が見開き1セットの構成。

下段右：苦沙弥先生=漱石のあばた面をとり上げた挿画は大変珍しい。

下段左：下が再刊された『画譜吾輩は猫である』。これが再刊である云々の記載は全くない。

この全集は昭和初期に訪れた空前の円形ブームに際して、その火付け役を担つた歴史的企画。その刊行経緯についての詳述をここではしないが、あるいは三段組に収まつた「猫」の最初の例だろうか。ここには第三章までが収録された。

後の三巻本『夏目漱石全集』(春陽堂、一九六五)では、「猫」の全編に三段組(夏目漱石)。(春陽堂、一九二七)でも第三章までが収録された。

さて、『新選夏目漱石集』と

は何か？ 改造社版円本全集

が注目を浴びたのは、装丁者が杉浦非水の功績に負うところが大きいが、一方の『新選』の方は、おざなりに尽きる出来

ばえ。円本の売れ行き好調に舞い上がったのか、「猫」の四章以降に加えて全集では未収録だった作品を組み合わせて急遽刊行したものか？ この書の巻末に同趣旨の企画が二五冊も挙げられているが未見。

『新選夏目漱石集』
改造社
一九二九(昭和四)

二三〇ページを費やしている。さらに「全文小説全一冊」と謳つた『ザ・漱石』(第3書館、一九八五)はA4判、四段組で八〇ページを充てているが、漱石による文学作品中、「猫」は最も大部な作品。したがつて原則一人の作家に一冊を充てて編む文学全集では尋常なやり方で「猫」の全編を収録するのが難しく、自然、「猫」は部分収録するか収録 자체をあきらめるかのどっちかになる。この点では、全集には必須アイテムの中編「坊ちゃん」の敵ではない。当時、円本の対抗企画として刊行された『明治大正文学全集』(二七一九六五)では、「猫」の全編に三段組(夏目漱石)。(春陽堂、一九二七)でも第三章までが収録された。

吾輩は猫である



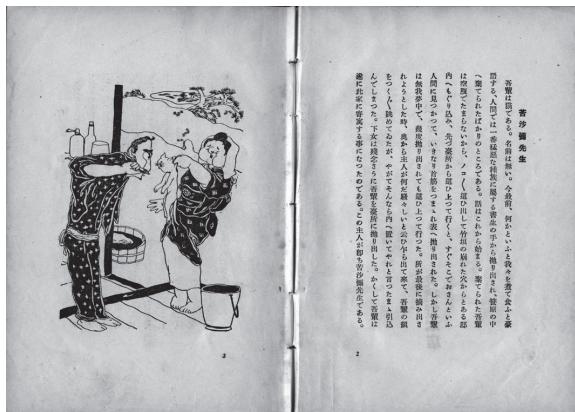
『漫画吾輩は猫である』

近藤浩一路 新潮社 一九一九(大正八)

戦前的新潮社文庫巻末に掲げる刊行書
目録に、この本が文庫の一冊として紹介
されていたので、私はこれを長年になつ
たつて探しあぐねていたが、最近になつ
て偶然遭遇したら、これが文庫判ハード
カバー仕立てだったと知つて驚いた。

『猫』の挿絵は、初版時の中村不折・
浅井忠によるものその他は意外に良いもの
が少ない。そんな中で、近頃では村上豊
による挿画は出色だが(講談社青い鳥文
庫、一九八五)、ここでは大正期のこの
名作を銘記しておきたい。

かつて挿画家として華やかな活動をし
ていた近藤浩一路は、ある時期から以降
は挿画の筆を折り、「本絵画家」の道を
探ったが今ではほとんど忘れられてい
る。惜しいことをした。リライトの才も
相当なものだ。この本は、後に龍星閣か
ら『画譜吾輩は猫である』(一九五四)
として再刊されたが、ここでは書誌に
ついてまったく触れられていないので、
こつちをオリジナル本だと思つてしま
人もいるのではないだろうか? 昔、私
はこれをゾック本屋で入手した。



『夏目漱石全集第一巻』

春陽堂書店一九六五（昭和四〇）

『夏目漱石全集3・4』

日本ブック・クラブ一九六七（昭和四二）

『吾輩は猫である』

春陽文庫一九六八（昭和四三）

表題だけはさすがに「吾輩は猫である」のままだが、この三書中の本文表記は、「わがはいはネコである」になっている。文庫版のジャケットに「当用漢字・新かなづかい」と惹句しているように、これは相當に思い切った試みだった。これらは文芸評論家荒正人の仕事になるようだが、これによつて「猫」における漱石特有の用字用語法がかなり払拭され、その結果、この小説の骨格がどう顕現されたのか、されていないのか？ これは微妙なところである。私はこの形で通読したことがないので、あまり踏み込んだことは言えないのだが、後述する翻訳版の「猫」にも通底する問題が提起されているのかもしれない。

当用漢字には「犬」はあつても「猫」が入つていなかつた。加えて動物の名はカタカナ表記にするという原則に従つた

のでこの表記になつた。今でもゾウ、キリンなどと表記するのに私たちには奇異な感じを抱かない。ところで、当用漢字表では「猫」が排除されたにもかかわらず「犬」は採用されて圧倒的に犬優位だつたので、ここでも「犬」の表記はそのまま漢字を使つている。ここでは「イヌ」にした方がその趣旨に添つていたのではないか。ついでに言えば、かつての当用漢字には「猿」も入つていなかつた。文字通り「犬猿の仲」だったわけだ。

現在の常用漢字では「吾輩」も「猫」も復権し、一九七九年以降になると、春陽堂少年少女文庫世界の名作・日本の名作「猫」（上・下）では、「ネコ」も「猫」に復し、「わがはい」も「吾輩」に返つたから、当初の問題提起もウヤムヤのうちに終わつてゐる。



→中段：「吾輩」は「わがはい」、「猫」は「ネコ」に（日本ブック・クラブ版）。下段：春陽堂版の文庫（中央）の表紙や全集（右）の保護用の函にも「当用漢字」「新かな」と大きく記載されている。



←上段：編集方針同様、なかなか力の入った装丁の集英社版全集。

下段：「吾輩」「我輩」「余」の混在が復活。でも、なぜか岩波流に終ルビ。

『漱石文学全集』

集英社 一九七〇（昭和四五）



伊藤整、荒正人によつて、それまでの岩波版漱石全集による「定本化」を批判し、生原稿や初出時の用字用語法を尊重して新たな校訂を施したとするテキストを提示したもの。あれだけ徹底的に当用漢字・新かなづかいによる『猫』の普及を押し進めた荒正人が、一方ではこんな仕事をしていたのだ。伊藤整はこの企画の大綱を決定した段階で亡くなつたの

現場を離れて短大で編集実務講座を担当する下つ端講師に赴任したばかりで、その壮大な出版企画など量りようがなかつた。しかし、津田青楓装丁になるざつくりした平織り綿布に鮮やかな彩りの図柄を施した堂々たる本書の体裁には驚いた。背文字の金箔共々、今でも色褪せることなく他書を睥睨している。

当時の定価二三〇〇円は私にはとんでもない値段で、第一巻を入手するだけで精一杯だった。

「すでに岩波の立派な全集があるのに何を今更迷惑だ」と思ったのが浅学の悲しさ。

それでも『猫』だからと思つてイヤイヤ一枚払つて入手したのだ。

編者の荒正人に対しては、学生の頃、巨大教室で「文芸思潮」なんていふマス授業を聞かされ、その結果ドストエフスキイが大嫌いになり、後年、日本橋丸善の店頭で売り場の女の子をしつこ

で後を荒正人が引き継いだものだと、第一巻の月報に記されている。

この本が刊行された当时、私は編集の

現場を離れて短大で編集実務講座を担当する下つ端講師に赴任したばかりで、そ

の壮大な出版企画など量りようがなかつた。

しかし、津田青楓装丁になるざつく

りした平織り綿布に鮮やかな彩りの図柄を施した堂々たる本書の体裁には驚いた。

背文字の金箔共々、今でも色褪せる

ことなく他書を睥睨している。

当時の定価二三〇〇円は私にはとんでもない値段で、第一巻を入手するだけで

精一杯だった。

「すでに岩波の立派な全集があるのに何を今更迷惑だ」と思ったのが浅学の悲しさ。

それでも『猫』だからと思つてイヤイヤ一枚

払つて入手したのだ。

編者の荒正人に対しては、学生の頃、巨大教室

で「文芸思潮」なんていふマス授業を聞かされ、

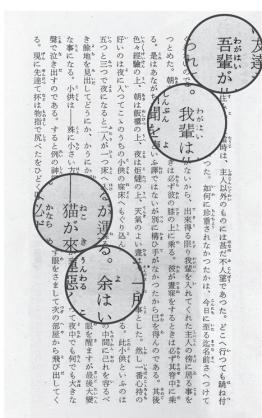
その結果ドストエフスキイが大嫌いになり、後年、日本橋丸善の店頭で

売り場の女の子をしつこ

くとつちめて泣かせている姿を目撃し、さらにムムム、というような怨んだ情報をしこたま仕込んでいたので偏見に凝り固まつっていたのだ。

ところがある時、本書の「本文校訂について」を読んで驚倒した。以来、何度も読み直したろうか？ その度に襟を正す。荒正人先生、ごめんなさい。私は生意気な学生でした。巻末に「異同表」を設け、「集英社版、初出、初版」における異同を明らかにしている（なぜ総ルビにしたのか断りがないのは疑問）。

前掲、岩波の四六判漱石全集でも、少し形式を異にするが「校異表」を付し、校訂の方針を明示し、巻末の注解凡例では、集英社版「漱石文学全集」の「達成から多くの恩恵を受けた」と断つている（岩波版ではルビの扱いについても明示）。





「吾輩」を「I」に置き換えるだけでいいのか?と思ふのは大方の感想だろうけれども、「吾輩は猫である」を「I am a cat」と訳すのは結構早くから行われていて、安藤貫一がその最初の英訳を一九〇六年に大倉書店から出版している。それは『猫』の第二巻目が刊行されるのとほぼ並行する。同社は『猫』の版元でもあるから、漱石はこの訳を認知していたと思うのが自然だろう。かつて、「わがはい」は明治の下級警官がよく用いた語で、漱石はこれを意識していたのだろうと説く解説を読んで、そんなものかと納得もしていたのだが、はたしてこんなに矮小化した特定をして良いのかどうか、今ではこの説を少々疑わしいと思うようになっている。

「私」を誇張的に表現するための用語法であったと考へると、「吾輩 我輩、余輩 余」等のプレも少し納得できるような気がする。

試みに F. Zufelt 訳 (IBCパブリッジング、二〇〇六) の冒頭を不ツトで大坂弁に自動翻訳してみた。

I am a cat. I have, as yet, no name.
Where was I born? I have no idea. I only
remember crying in a dark, wet place.

わいは、猫や。わいには、まだ、名前が
おまへん。じりじり、わいは生まれたんや
か? わいはまるつきしわかれへんや。
わいは、暗い、湿った場所で泣おつたの
を憶えとるだけや。



中段: 英訳本の数々。
下段: 派生した作品をいくつか。猫を生き返らせての後日談やミステリーなど、内容も様々。
『猫』は時代を超えて人々のイマジネーションを刺激し続けているということか。



読者ページ

二代目酒井九ボ堂こと酒井道夫が、武藏野美術大学教授を退任するにあたり製作したCD-ROM「武藏美に40年—遍歴のあしあと」を抽選で20名様に差し上げます。(1)希望の方は住所、氏名、九ボ堂CD-ROM希望と明記の上、press@mutsabi.ac.jp (武藏野美術大学出版局宛にメールにて) 応募下さい。(2)二〇一〇年九月三〇日締め切り(着信)。なお、当選者の発表はCD-ROMの発送をもって替えさせていただきます。



国際図書展を通して見たサウジアラビア

浦山 毅
(東京電機大学出版局)

第二八回リヤド国際図書展(二〇一〇年三月二一～二二日、在サウジアラビア日本国大使館、国際交流基金、出版文化国際交流会＝P A C E ＝共催)に派遣専門家として出席するため、二月二八日から三月七日にかけて首都リヤドに出張した。サウジアラビアは地理的に遠いだけでなく、何かと知らないことが多い国である。今回は、図書展の日本ブース運営、講演、表敬が主目的だったが、出版文化を含めてできるだけ多くの情報を収集することも目的であった。国際図書展の詳細は P A C E 会報に譲るとして、ここでは紙幅の関係からサウジアラビアの情報に絞つて報告しようと思う。この場を借りて関係者の方々にお礼を申し上げたい。

サウジアラビアへの入国

サウジアラビアは数年前から観光ビザを発行している。

自動車、石油、工業化学、真水処理といった商用目的では、そこそこ日本人も訪れている国だが、観光が目的で訪れた日本人はいつたいどのくらいいるだろうか。

ビザ申請用紙には、母親の名前、最終学歴と学部、企業名と役職、ビジュラ暦、宗教などを書く欄があった。宗教欄に "None" (なし) は許されず、"Buddhism" (仏教) と書くように指示された。今回はビザがなかなか下りりず、ビザが入手できたのは出発日の四日前であった。

成田空港から香港経由で約一七時間。夜の暗闇にドバイのまばゆい光を眺めてから、近代的なキング・ハリード空港に到着。入国審査は厳しく、雑誌やDVDもすべてチェックされるという話だったが、今回は妻同伴が奏効した。就労用の混雜した査証カウンターではなく訪問用の空いたカウンターに行くことができ、また大使館付の現地係員が手荷物検査室にいたおかげで荷物も開封されずに済んだ。

サウジアラビアの文化と習慣

リヤドにはバスや鉄道といった公共交通機関がなく、おもな移動手段は自動車である。道路は整備されていて、片側三～四車線の高速道路が市内縦横に張り巡らされている。車は右側通行。ガソリン代は満タンで八〇〇円ぐらいだという。女性は運転できないので、運転手はすべて男性である。ホテル、講演会場、図書展会場、表敬で訪れた大学や図書館はかなり離れた場所にあり、移動手段はすべて日本国大使館が手配してくれた車であった。

イスラム教の教えを厳格に守っているサウジでは、一日五回のお祈りは欠かせない。その時間になると、みなモスクに行つてしまい、街中の店は閉められる。さいわい図書展会場が閉められることはなかつたが、店員や来場者はぐつと減つた。サウジでは夏場に気温が五〇度にもなることから、本格的な活動時間は午後三時以降である。

サウジでは、男性と女性が同じ空間にいることが厳しく制限される。結婚式でさえ男性と女性は別々の部屋で過ごすという。図書展会場内は男女がともにいられたが、日や時間によつては、男性だけの入場が許された。ちなみに、後述する講演会場は背の高いフェンスで中央が仕切られ、男女が分かれ座つた。

サウジの女性は「アバヤ」とよばれる黒マントを着用し

なければいけない。これは外国人女性も例外ではない。妻も日本国大使館からアバヤを借りて、終日それを身につけて過ごした。アバヤには、全身黒づくめのもの、眼だけ出でるもの、あるいは首から下だけマントを着て髪は黒のスカーフで隠すスタイルもある。この規則を守らないと、巡回しているムタワ（宗教警察）に注意される。

食生活についても、いくつか制約がある。アルコールと豚肉は摂取できない。食事のときは、水か、リンドジュー・ス（それほど甘くない）が一般的で、コーラやスプライトやヨーグルトも飲まれている。伝統的な料理は「カブサ」で、味を付けて炊いた長米の上にローストした骨付き肉をのせたもの。左手は不淨とされ、右手だけで器用に食べる。食事の量は半端でなく多く、残すことが美德とされている。残り物はまた別の人たちに食されるのだという。

サウジでは、建物の外観は撮影できない。街中でカメラを持ち歩いていると、没収されたり連行されたりするといふ。建物の内部は撮影可能だが、人を撮つてはならず、カメラをかまえて撮影をとがめられたら即座にやめなくてはならない。今回の出張では地元の写真を多く撮つてきたが、許可を得て撮影したり、ポケットにカメラをしのばせて隠し撮りしたものである。

サウジの木・金が、日本の土・日にあたる。サウジの金曜日（日本の日曜日）は基本的にすべての店が休む。図書展会場は開いていたが、金曜日は終日、男性のみの日であ

つた。三月五日（金）は来場者が少なく妻も入れなかつたため、市内視察の日に充てられ、らくだのステク（市場）、赤の砂漠、国立博物館などを見てまわつた。現地の木・金・土・日の四日間はサウジアラビアか日本のいずれかがお休みモードなので、一日をフルに使える日は月・火・水の三日間しかなく、大使館では曜日に気を遣うそうである。

第二八回リヤド国際図書展



にぎわう日本ブース。棚にはアラビア語で「見るだけですよ」の掲示が並ぶ。

図書展は、朝の一〇時から夜の一〇時までリヤド国際展示場で開催された。サウジアラビア文化情報省が担当し、招待国はセネガル、参加国数は二三カ国、出展組織数は三六六であつた。公式ホームページによれば、会期中の総入場者数は二〇〇万人以上、出展された本の数は二五万冊であつたといふ。

加国を記すと、セネガル、ヨルダン、ドイツ、アラブ首長国連邦、アメリ

カ、イラン、バーレーン、イギリス、トルコ、チニニア、サウジアラビア、オマーン、スー丹、フランス、スウェーデン、クウェート、レバノン、エジプト、モロッコ、インド、日本、イエメンであつた。

日本ブースは連日の盛況で、多くの人がマンガと折り紙に興味を示した。アラビア語で「売っていません。見るだけですよ」と書いた紙をブース内の随所に掲げたにもかかわらず、マンガを手に取つた子供たちが「これ売つてください。お金なら持つています」と言つてきたのがとても印象的であつた。どうしても欲しかつたのである。

マンガはサウジでも大人気で、「ドラえもん」（現地ではアブクールという名前になつてゐる）や「キヤブテン翼」「コナン」「となりのトトロ」などが吹き替えや字幕付きでテレビ放送されたり、コミックとして売られたりしているそうである。また、インターネットのユーチューブで日本語のまま流されたりしているのを、地元の子供たちは楽しみに見ているという。「こんにちは」「お元気?」などと日本語で語りかけてきた子が何人もいた。彼らは日本のマンガを見て、またはマンガが読みたくて、日本語を覚えようとしているのだ。

講演会

リヤド市内にある「リヤド文学クラブ」では地元の老若男女を集め、定期的に映画や講演を催している。これま

で、日本に関する映画を上映した

こともあるとい

う。今回はそこを

会場にして、『日

本の出版文化とデ

ジタル化事情』と

題して話をした。

講演はスライド

の上映も含めて約

二五分間、私が日

本語で話し（スラ

イドは英語）、通

訳が同じぐらい時間

をかけてそれをアラビア語に訳し、最

後に質疑応答を加えて約一時間で終える計画だったが、先



リヤド文学クラブの建物正面。建物外観の撮影は原則禁止のため、日本国大使館の人あとで送ってもらった。

表敬・訪問

日本国大使館の計らいで、いろいろな方と情報交換を行うことができた。表敬・訪問先は、サウジアラビア文化情

報省、講演通訳者のご自宅、リヤド文学クラブ、在サウジアラビア日本国大使館、キング・ア卜ドゥルアジーズ公共

図書館、キング・サウード大学出版局と同日本語学科。

大使館の遠藤大使は「日本とサウジアラビアはこれまで

石油や自動車といった経済面では協力してきたが、今日、

浦山さんの話を聞いて、大学や出版文化という面での協力

もありうるということに気がついた」と話された。

キング・サウード大学出版局では「日本の歴史や科学・技術に関する本を翻訳したいと思つて東大出版会のホームページにアクセスしたことがあつたが、英語が載つていなくてあきらめた」と話された。

地元テレビ局がつくった日本に関する番組

図書展の数カ月前に、現地のテレビ局が、日本の生活や文化に関する短い番組を約一ヶ月にわたつて放送した。ラマダン（断食）月の夕食時間に流されたことから、多くのくらいか、東南アジアの国でも日本語を使つているか、アラビア語と同じように日本語にも方言はあるか、段落の一字下げについて、電子書籍の採算部数は、などだつた。

質疑応答は活発で、男女を問わらず次々と質問の手が挙がつた。質問の内容は、生物学と工学について、日本の詩について、マンガの普及度、漢字のルーツは、漢字の数はどうのくらいか、東南アジアの国でも日本語を使つているか、アラビア語と同じように日本語にも方言はあるか、段落の一字下げについて、電子書籍の採算部数は、などだつた。

舞台は日本。たとえばサーティワン・アイスクリーム屋のこと。店員はまず店内で食べるか持ち帰るかを聞く。客が持ち帰ると答えると、家までの時間がどのくらいかか

るかを聞く。その答によつて、箱に入れるドライアイスの大きさを変えるのだという。また、公園のベンチに財布が置き忘れられている。そこに親子が通りかかる。親子は財布を拾い上げると、それを交番に届けるというもの。

こうした小さなできごとを、連日取り上げて放送した。その後、物をなくした人が「日本人に拾われるといいね」と言うようになつたという。ちょっとやらせ的な要素がないとはいえないが、その番組の影響で何割かのサウジアラビア人が日本に関心を抱くようになつたらしい。ちなみに、その番組名は「改善」だつたという。

地元学生たちの海外留学

アテンダントの学生や友人たちは、近い将来、日本に留学したいと話していた。国の試験に合格すると、まず日本にある日本語学校（日本語教育センター）に一年間通う。そして日本の大学や大学院を受験。合格すればそのまま進学するが、落ちたらサウジに戻るという制度である。

一般に留学をめざしている子たちはある程度の財力に恵まれ、その気になれば私費留学も可能だが、それではキヤリアに結びつかないので、あくまでも国費留学をめざすといふ。就職対策と考えられなくもないが、私には学生たちがもつと先を見据えて、積極的に海外の知識を吸収しようとしているように見えた。

帰国後に思うこと

期待と不安を胸に抱いての出発であつたが、無事に帰国したあとは出張中の楽しさと懐かしさがよみがえり、サウジへの興味と関心が高まつた。いま通勤の電車の中では、アラビア語の入門書を読んでいる。成熟したフランクフルトもいいが、未知数の多い國もまた魅力的である。機会があれば、また行きたいとさえ思つている。

講演で、「どうして日本はもつと情報発信しないのか」「どうして日本人はもつとサウジに来ないのか」と質問された。「してるつもりなんだけど……」「エジプトみたいに入りやすければ……」と言ひ訳は思いついたが、国際関係を考慮して、回答は日本国大使館の人にお願いした。

国際化に向けて、日本はもつともつと積極的に情報を発信していく必要があると感じた。ホームページにせめて英語を添えたい——いま思つてることである。

大学出版部ニュース

北海道大学出版会

弘前大学出版会

● 東京国際ブックフェア 七月八日～十一日にかけて第一七回東京国際ブックフェアが東京ビッグサイトにおいて開催された。加盟三三二出版部の書籍が一堂に揃つて展示販売される数少ない機会でもある。営業部会の尽力で、多くの入場者に大学出版の存在感を示す事ができた。

大学出版部協会夏季研修会及び第三回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー 八月二日～三日の三日間、大学出版部協会夏季研修会が奈良県新公会堂で開催される。同時に新型インフルエンザの影響で延期された「第一三回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー」が、韓国・中國代表団を迎えて開催される。セミナー主題は「大学出版部の弘報戦略」。大学出版部協会の四部会・事務局による協会弘報活動を描いた日本側レポートは説得力のあるものになっている。セミナー参加者の他、多くの人には是非読んで頂きたい。京都セミナー（二〇〇六年八月）に次ぐ奈良新聞の合同広告も弘報活動の一環として行われる。

関係を検討。

（北海道大学大学院文学研究科研究叢書）

▼ 藤田健著『ロマンス語再帰代名詞の研究—クリティックとしての統語的特性』

（A5判・七八七五円）生成文法の枠組を用いて、フランス語・スペイン語・イタリア語を対照的に分析。

▼ 真嶋俊造著『民間人保護の倫理—戦争における道徳の探求』（A5判・三一五〇円）応用倫理学の立場から包括的、体系的に検討。

▼ 宮崎聖明著『宋代官僚制度の研究』（A5判・七五六〇円）官制の変遷過程と官制改革の歴史的意義を明らかにする。

▼ 諸岡卓真著『現代本格ミステリの研究—後期クイーン的問題』をめぐつて』（A5判・三三六〇円）新本格からゲームまで現代ミステリの初の本格的研究。

▼ 江尻徹誠著『陳啓源の詩經学—毛詩稽古編』（A5判・五八八〇円）成立や編纂過程、詩経学の特色と後世への影響を明らかにする。

▼ 池田利昭著『中世後期ドイツの犯罪と刑罰—ニュルンベルクの暴力紛争を中心』（A5判・五〇四〇円）参事会の刑事司法と都市住民のインフォーマルな社会的コントロールとの関

▼『グローバル下の北東北地域・地域経済・財政・住民福祉の現状』（神田健策・井上博夫編著）（A5判・二四四頁・定価二四五円）

▼『国立大学法人弘前大学 知的財産扱いの手引き』（弘前大学知的財産本部・地域共同研究センター・学術情報部社会連携課編）（A5判・一二四頁・定価二〇〇円）

▼『ハードウエア設計・演習（基礎からプロセッサ設計まで）』（吉岡良雄・一條健司著）（B5判・一〇二頁・定価一八九〇円）

▼『白神山地で活躍する人々—観光編』（弘前大学白神自然観察園編）（A4判・五八頁・定価一〇五〇円）

▼『ノーベル医学・生理学賞に見る現代西洋医学の系譜』（松木明知編）（A4判・一八八頁・定価一〇五〇円）

▼『A Paean to Sir William Osler サー・ウイリアム・オスラー讃歌』（松木明知編集・解説）（A4判・一七〇頁・定価九四五〇円）

東北大出版

流通経済大学出版

監修出版

▼石川洋著『はじめての物理数学』（A5判・二五〇頁・一八九〇円）

数学は、物理にとって無くはならない「ことば」である。本書は、理工系学科の大学生を対象とした物理数学の入門書。内容を力学・電磁気学に使われる数学の基本的なものに限定し、各章ごとに達成すべき「目的」を設定。つまづきやすい箇所については計算過程も含めて詳細かつ丁寧に説明を加えている。

▼先崎彰容著『個人主義から「自分らしさ」へ—福沢諭吉・高山樗牛・和辻哲郎の「近代」体験』（A5判・一七〇頁・二九四〇円）

個人の積極的参加による国民国家形成の物語（近代的な個人主義）も、マルクス主義の世界観も、やはや今日の人々の心を搔き立てるほどの魅力を発してはない。いまの時代を担う、新たな思想史像を創るキーワードは何か？個人主義に代わる「自分らしさ」の思想を、福沢諭吉・高山樗牛・和辻哲郎、さらに山路愛山・坪内逍遙・石川啄木・三木清などの中に探す、若手研究者による近代日本思想史像再構築の果敢な試み。

▼『企業間関係の構造—企業集団・系列・商社』島田克美著（A5判上製・三六六頁・四一〇〇円）

▼『社会科学は面白い—初めて社会科学を学ぶ人へ』流通経済大学社会学部入門書編集委員会編（B5判・二八〇頁・一五七五円）

▼『貨幣と市場の経済思想史—イギリス近代経済思想の研究』小池田富男著（A5判・一一九二頁・定価四四一〇円）

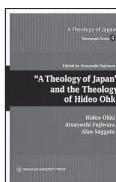
▼『農業立地変動論—農業立地と産地間競争の動態分析理論』河野敏明著（A5判・六一〇頁・定価六一〇〇円）

▼『[改訂版] 交通学の視点』生田保夫著（A5判・一一〇〇頁・定価三六七五円）

▼『現代経営管理と経営戦略モハル』宮脇敏哉著（A5判・四〇六頁・一一六七五円）

▼『安価な石油に依存する文明の終焉—蘇る文明と社会』若林宏明著（A5判・三八二頁・三五七〇円）

▼『世界の鉄道経営「今後の選択」—わが体験的（一一一世纪）鉄道論』角本良平著（A5判・一一〇四頁・一一〇四五円）



▼ Atsuyoshi Fujiwara, ed. "A Theology of Japan" and the theology of Hideo Ohki: A Theology of Japan, Vol. 4' (改訂版) 一〇六頁・一六〇円

This volume contains Professor Hideo Ohki's writings on the project he initiated, "a theology of Japan." It also

contains a response to "a theology of Japan" from the West by Dr. Alan Suggate.

▼ Protestantism and Democracy: A Theology of Japan, Vol. 5' (改訂版) 一〇四頁・一六〇円

This fifth volume contains selected essays from two conferences that Seigakuin University General Research Institute hosted in 2008, "Rethinking of the tradition of Liberal Democracy since World War II" and "Trinitarianism: Going beyond the criticism from Monotheism and Radical Pluralism."

聖徳大学出版会

▼村井清児著『音楽療法を語る—精神医学から見た音楽と心の関係』(四六判・二八〇頁・二一〇〇円) 音楽療法の第一人者である著者の、長年にわたる研究をベースにし、専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となつている。音楽療法は心身の病理に対ししてどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのか、心と音楽との関係を解き明かす。

▼森彪著『医における癒し—人間関係の形成のなかから』(四六判・二八〇頁・二一〇〇円) 本書では小児科医の医療現場での経験をもとに、病気と闘つた人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粹な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間的交流の必要性を強く訴えかけている。

▼高橋大海監修・Jソロイスツ歌唱『親子で楽しむ唱歌集』(音楽CD・三四〇円) 文部唱歌をはじめ、「春が来た」など文化庁「親子で歌いつごう日本の歌百選」にも選定された「小さい秋みつけた」など文化庁「親子で歌いつごう日本の歌百選」にも選定されている。

麗澤大学出版会

▼遠藤浩一著『福田恒存と三島由紀夫—1945~1970』(上・下)(各巻一九四〇円) 戦後は未だ終わってはいない。日本が日本でなくなった時代に日本を背負った二人の文士。表現者、行動者としての福田と三島の光芒を戦後精神史に追う、いまを撃つ大型評論。

▼小川宏著『六病急患』の小川です! (一五七五円) 永遠のアナウンサー・小川宏が、自らの体験をもとに、ユーモアをまじえ、心をこめて語りかける「老い」と「病」、そして「一日一生」の生き方。 ▼伊東俊太郎著『伊東俊太郎著作集第六卷 ガリレオと科学宗教』(八一九〇円) ▼福田恒存著『福田恒存評論集十六巻 否定の精神』(二九四〇円) 表題作の他、全集未収録作品を收める。

「戦後は未だ終はつてはゐない。
自分が日本でなくなった時代日本を背負つて二人の文士。
表現者、行動者としての福田と三島の光芒を戦後精神史に追ふ。
現在を撃つ大型評論。
第10回正論新風賞受賞
慶應大学出版会

慶應義塾大学出版会

▼奥田博子著『原爆の記憶 ヒロシマ/ナガサキの思想』(三九九〇円) 戦後、ヒロシマとナガサキは、何を象徴し、神話化してきたのか。原爆の投下と被爆の人類史的意味を改めて検証し、ヒロシマとナガサキを考える意義を明らかにする。

▼福澤諭吉著/伊藤正雄訳・注/安西敏三監修『現代語訳 文明論之概略』(三六七五円) 維新の動乱冷めやらぬ明治社会に向け、福澤諭吉が渾身の力で書き下ろした名著。現代人には難しい明治の文章を、碩学が正確に現代語訳した書籍を再編集して復刊。古典が、すらすら読める!

▼速水融著『歴史学との出会い』(二五二〇円) 二〇〇九年に文化勲章を受章した、歴史人口学の第一人者によるエッセイ集。恩師や研究者仲間、古典、新しい研究手法などとのさまざまなかつての「出会い」から、自身の研究のあゆみを振り返る。

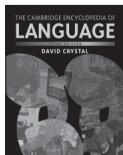
▼樋口美雄他編『パネルデータによる政策評価分析 [1] 貧困のダイナミズム—日本の税社会保障・雇用政策と家計行動』(四二〇〇円) 同一個人を追跡調査する「日本家計パネル調査」の成果発信。研究者・政策担当者必読のシリーズ。

ケンブリッジ大学出版局

産業能率大学出版部

専修大学出版局

►The Cambridge Encyclopedia of Language, 3rd Edition (Hardback 9780521736503 USD 45)



言語を志す人必携のクリスタルのベストセラー「ケンブリッジ版言語百科事典」の待望の第三版です。十三年ぶりの改訂となる本書では、一九九〇年代中頃からから携帯メールに至るまでの電子コミュニケーションの増加、言語の消滅の二つ新しい分野が加わりました。

►The Cambridge History of the Cold War 3 Volume Set
(Hardback 9780521839399 USD 450)
「ケンブリッジ版冷戦の歴史」は、二十世紀の国際政治を席巻した紛争の包括的な世界史です。地理的および国家的な多様な視角を通じて、一国的（とりわけアメリカ的）アプローチから、より視野の広い国際的アプローチへの転換を告げる待望の書の登場です。

※分冊でのご購入も可能です。

▼荒巻基文著『プレゼンテーションの技術』（一五七五円）プレゼンテーションに求められる力を、「知識」「感情」「意志」「技」の側面から、ストーリー仕立ての事例を通じて理解・習得する。

▼樋口祐一著『文章表現の技術』（一五七五円）。筋道立てた分かりやすい文章や、印象深く説得力のある文章を書く力について、豊富な文例やトレーニング問題を通じて身につける。

▼櫻井弘著『話し方の技術』（一五七五円）「人前で話す、人と話すことが苦手」を克服する。「相手の心をとらえる、説得力のある話ができる力」を磨くための一冊。

▼産業能率大学出版部発行『平成二十二年度版 徹底解説・一次試験 インターフェース・イネーメンテーション問題』（一七三〇円）&『平成二十二年度版 徹底解説・二次試験 インテリアード・イネーメンテーション資格試験問題』（三六七五円）。過去五年間の試験問題との解説と解説、試験問題の傾向と対策、受験資格のガイドなどを掲載。インテリアード・イネーメンテーションの資格試験合格に導く問題集として最適。

▼川上周二著『フライテルフィアの宗教とその社会』（A5判・二五二〇円）米国フィラデルフィア市はアメリカ独立の記念の地であり、その開放的な土地柄から移住者も多く、幕末から明治期以降は日系移民が増えていった。当然住民の宗教活動も多彩で、現在は三百ちかい宗派千を超える教団があるといわれる。本書では二つの日系人キリスト教会（日本人キリスト教会とブリンマー日本語キリスト教会）の特性、組織、歴史、活動などを述べ、それぞれ独自に形成してきたエトスについて分析している。

▼根間弘海著『大相撲行司の伝統と変化』（A5判・三七八〇円）主に明治期以降の大相撲行司について、文字史料や絵図を丹念に掘り起こし、その歴史的経緯を明らかにする。木村庄之助や木村正直など元行司や現役行司に取材し、文献では解きほぐせない内容も補足した。軍配の握り方を巡って譲り合扇、行司と草履、幕下格以下行司の階級色、行司の帶刀、昭和初期の番付と行司、明治三十一年以降の番付と房の色、他。

大正大学出版会

玉川大学出版部

中央大学出版部

▼司馬春英・星川啓慈編『教養』のリメーク——大学生のために』新書判 七六〇円。近年、大学における教養教育の重要性が再認識された背景には、大学の社会的責任を明らかにするという要請とともに、二一世紀型の「知」が異なる専門分野同士の「越境」や「複合」を特徴としているという状況がある。専門研究そのものが幅広い教養に裏打ちされたものになる必要がある。学生もまた、大学でのこうした研究のあり方を実地に体験することを通じて、「自発的な知的拡張能力」を身につけた社会人として、育つしていくことができる。このようない点を踏まえて、山崎正和氏（中教審前会長）をはじめ本学教員が、それぞれの専門分野から教養について論述する。

▼カール・ベッカー、弓山達也編『いのち 教育 スピリチュアリティ』A5判 二八三五円。「いのち」「教育」「スピリチュアリティ」をキーワードに、価値観の喪失、道徳教育の衰退など、教育現場において向き合うべき課題を取り上げ、現状とその可能性について、医療、宗教学、教育学等の立場から論述する。

▼加藤幸次編『教育課程編成論』(A5判・二三二〇円)二〇〇八年に改訂された小・中学校の学習指導要領は、どんな議論や考えかたを背景にしているのか。教育課程の意義、カリキュラムの編成原理、教育評価の意義、指導要領の歴史など、学校教育を考えるヒントを示す。

▼佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』(A5判・二四一五円)大学教員に求められる知識と技術を提供。授業で学習内容をどう構成・配置するか、どう教えるのかを説明する。スタディ・スキル教育の基本、すぐに使える資料や授業実践例を掲載。教員向け研修の教科書として最適。

▼松本茂監修／ジョージ・W・ゼーベル ミューラー解説／柴田裕之・今泉真紀訳『アメリカを動かした演説——リンカーンからオバマまで』(A5判・一八九〇円)オバマ大統領の登場により、演説の可能性や重要性が見直されている。本書では、アメリカ史上重要な人物がおこなった、洗練され、完成度の高い演説を取り上げ、その背景、戦略、技法、語彙選択などを理解する。

▼建部正義著『金融危機下の日銀の金融政策』(二九四〇円)金融政策のあるべき姿に触れながら、金融危機下の日銀の金融政策の批判的な概説を試みた。あわせて、「F.R.B.は日銀の経験から何を教訓として学ぶべきであったか」「日本と中国の金融政策比較』を収録する。

▼藤本哲也著『刑事政策研究』(四四〇円)本書は、近代的刑務所の起源について論述すると同時に、現代の我が国ノーバル・システムの民営刑務所を紹介する。さらにブレイスウェイトの恥の理論、オーストラリアにおける知的障害犯罪者、高齢者虐待に対する修復的司法、犯罪予防等最近の刑事政策の動向を紹介する。

▼林惠玉著『中国の広告とインターネットの実態』(二二〇五円)中国ではインターネットを国家管理し、「ネット警察」を立ち上げ、言論弾圧を徹底させている。その実態を解説するとともに注目の「グーグル問題」にも言及。さらにアメリカ・日本・中国の企業広告に対する攻撃の実態、健康に危害を及ぼす中国国内の医薬・保健食品類広告の実態を解明。

東京大學出版会

▼吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市』（全四巻、各巻五〇四〇円）

大量生産・大量消費を基調とする資本主義世界システムとともに、瞬く間に普遍的な都市類型として全世界に普及した「現代都市」。その展望と可能性は、かつて実在し、豊かな歴史文化を成熟させてきた「伝統都市」との比較のなかにこそ宿るといえよう。

現代都市が抱える問題解決の糸口を歴史の深みのなかに見出すべく、日本・アジア・欧米の伝統都市を解析し、社会・文化・空間の特質を浮き彫りにし、歴史学と建築学の共同研究の成果でもある。世界の諸都市が、時代に生きる人々と共にいかに育まってきたかという実態を四つのキー概念から知ることで、変革の方途を構想する手掛かりが得られよう。

斯界の第一人者が集い、時代と地域を横断して都市と社会を読みとく都市史研究の到達点。

- 1 イデア
- 2 権力とヘゲモニー
- 3 インフラ
- 4 分節構造

東京電機大学出版局

▼西川尚男『燃料電池の技術』（二二三二頁・三五七〇円）家庭用および自動車用として開発された固体高分子形燃料電池（PEFC）は、CO₂の削減に大きく寄与するものと期待されている。PEFCの分野に携わる研究者や開発者の層が拡大すれば、信頼性が高く実用的で、低成本の家庭用燃料電池および自動車用燃料電池の開発の進展が期待される。本書はそのための一助となるべくまとめられた。

▼フェルドマン、サンガー共著／辻井潤一監訳『テキストマイニングハンドブック』（四九八頁・七五六〇円）コンピュータ科学の分野において情報爆発という危機的問題の解決に挑む新しくて刺激的な研究分野がテキストマイニングである。その構成要素にはデータマイニング、機械学習、自然言語処理、情報検索、ナレッジマネジメントといった分野の技術が含まれる。本書ではテキストマイニングの一般理論をその背景となる技術要素とともに紹介する。また、テキストマイニングシステムの一般的なアルゴリズムやデータ構造について概説する。

▼『発展途上国の農業・農村フューリード研究』—タイの事例分析から—熊谷宏・高橋久光・夏秋啓子・豊原秀和編著

このプロジェクトは、地域環境とよく調和し、持続的に発展する「地域農業と農村」の総合解明を目標とし、実現するための「フィールド研究の手法」を進化させることを念頭に行われた。

平成二十二年三月／A5判
一二八頁／税込価格一四七〇円

▼『不言実行こそが我が人生』—柔道と植木業で切り拓いた私のアメリカ—野崎住吉著

野崎氏は、東京農大校友会アメリカ支部長。郷里は長野。講道館柔道9段。学卒移民の成功者。パワーみなぎる人生を振り返る。

平成二十二年三月／A5判
一七三頁／税込価格二一〇〇円

▼『ハーブきく』近藤勝彦編

示された「菊畑へようこそ」が語るハーブの世界』をベースにまとめたもの

東京農業大学出版会

一四八頁／税込価格三三六〇円

東京農工大学出版会



東京農工大学が知的資産を世の中に還元する目的で発行している「人が学ぶ」シリーズの第三弾。

イヌは、いまから四万年ほど前に、野生のオオカミを人間が飼い慣らして創りだしました。それ以来様々な育種を繰り返して、様々な犬種を生み出してきました。

本書では、こうしたイヌの生態や体の仕組み、行動に隠されているイヌの感情など意外と知られていないイヌの習性を平易に解説している。たとえば飼い主にしかられてている時にあくびをするのは、飼い主をばかにしているのではなく、自分を落ちつかせようとする合図など、知っているとイヌとの関係を良好にするヒントになる。東京農工大学の獣医学科の教授ら五人による共著。

▼『人が学ぶ イヌの知恵』林谷秀樹・渡辺元・佐藤俊幸・甲田菜穂子・対馬美香子著（A5判・一六四頁・一四七〇円）
（税込み）

東京農工大学が知的資産を世の中に還元する目的で発行している「人が学ぶ」シリーズの第三弾。

イヌは、いまから四万年ほど前に、野生のオオカミを人間が飼い慣らして創りだしました。それ以来様々な育種を繰り返して、様々な犬種を生み出してきました。

本書では、こうしたイヌの生態や体の仕組み、行動に隠されているイヌの感情など意外と知られていないイヌの習性を平易に解説している。たとえば飼い主にしかられてている時にあくびをするのは、

飼い主をばかにしているのではなく、自分がせようとすると、それをとりまく家庭、地域、職場の環境を都道府県別に比較すると、地域格差が浮かび上がる。

青年層に現れ始めた危機の予兆に対して、すでに対策を始めた県もある。高齢化対策、少子化対策に終始する県は、「わが県の明日を担う」人々を見ていない、と著者は警鐘を鳴らす。

▼『舞田敏彦著 47都道府県の青年たち』
『わが県の明日を担う青年のすがた』（A5判・二三二頁・二三二〇円）

著者の前作『47都道府県の子どもたち』があなたの県の子どもを診断する』で試みたのと同じ手法で二十五～三十四歳の青年層を分析する。いわゆる「ロスト・サンス時代を生きた知られざる巨人、碩学にして狂人とさえ呼ばれたポステルの生涯と思想を包括的・体系的に論じる。

▼『J・W・トリート／水島裕雅ほか監訳 グラウンド・ゼロを書く』（九九七五円）
「沈黙でしか語りえないもの」を既成の言語によつて語ろうとする原爆文学の特質を、包括的かつ緻密に分析する。

▼『W・J・ブースマ／長谷川光明訳 ギヨーム・ポステル』（五一四五円）ルネサンス時代を生きた知られざる巨人、碩学にして狂人とさえ呼ばれたポステルの生涯と思想を包括的・体系的に論じる。

法政大学出版局

武蔵野大学出版会

武蔵野美術大学出版局

明星大学出版部

関東学院大学出版部

▼『石元泰博——写真という思考』森山 明子著（A5判・三三三頁、四四二〇円）

石元泰博は特異な写真家であり、偉大な写真家である。一九四八年から四年間シカゴのニューバウハウスで写真を学び、ライフ誌主催のヤング・フォトグラファーーズ・コンテスト入賞、モホイ＝ナジ賞を二年連続受賞などの実績を残し一九五三年に来日。以来、写真家石元泰博の軌跡は、日本のデザイン・芸術運動の最先端と重なる。丹下健三、亀倉雄策、田中一光、杉浦康平、そして瀧口修造、勅使河蒼風、岡本太郎らが石元と組み、いまでは伝説的とも言える多くの写真集、展覧会を残した。

『ある日ある所』『シカゴ、シカゴ』『桂日本建築における傳統と創造』『伝真言院両界曼荼羅 教王護国寺藏』『桂離宮一面觀音』『伊勢神宮』など写真集は四〇冊を超え、日本、アメリカ、カナダの主要美術館に多くのパブリックコレクションを持つ。本書は石元泰博初の評伝であり、ドキュメントである。

▼『ここから始めよう 小学校英語—楽しい指導の第1歩』渡邊時夫・佐藤令子・柏谷恭子著（B5判・一六四頁・一二六〇円）【七月刊】

平成二三年度から小学校「外国語活動」として英語教育が始まる。英語によるコミュニケーション能力の素地とは何か、それを築くための望ましい指導法は何か。早期英語教育の研究、小学校英語教育の実践活動、英語教員養成の仕事に携わってきた三名による教育法・指導法入門。

▼『教員・教職志望者のための教育法の基礎—教育政策の法制・組織・財務』

樋口修資著（A5判・三六八頁・二二三〇円）法制・組織・財務に関する教育法規・判例を、今日的観点から15章に分けて解説。ミニマム・エッセンスを摘要・叙述して、学校教育の場における様々な事象をどうとらえるべきか、その判断と対応を示唆する。脚注形式で「キーワード」欄を設け、具体的な事例をコラムで紹介した。

▼『国語科教育入門—小学校教員を目指すために』長谷川清之著（A5判・二八八頁・二二〇〇円）



▼『はじめて学ぶ経済学』関東学院大学経済学部編（一八九〇円）本書は、経済史からの歴史的アプローチとミクロ・マクロ経済理論による理論的アプローチの両面から経済学の全体像をとらえようとしたユニークな経済学入門書。見やすい図表とともに国際経済学やゲーム理論もコンパクトにまとめている。

経済学部 経営学科編・齊藤毅憲監修（二五七五円）初学者が企業経営や経営学をおもしろく感じることができるように、内容を絞り、専門用語をわかりやすく解説、企業経営を具体的にイメージできるコラムや図表をとりいれた特色あるテキスト。

東海大学出版会

- ▼奥谷喬司『新鮮イカ学』(二九四〇円)。一四名からなる執筆陣が送りだす、渾身のサイエンスエッセイ。生物学、生態学、進化、一生、資源などの様々な視点から「イカ」を学ぶ。
- ▼【フィールドの生物学シリーズ】川田伸一郎『3巻 モグラ—見えないものへの探求心』(二一〇〇円)。岸本圭子『4巻 虫をとおして森を見る—熱帯雨林の昆虫の多様性』(二一〇〇円)。※八月刊行予定。著者が世界中のフィールドで行ってきた調査・採集・分類などの研究から得られた最新の情報を、エピソードを交えながら紹介する。
- ▼野口和彦『パワー・シフトと戦争』(二九四〇円)。なぜ戦争は起るのか?国際政治学の普遍的テーマである戦争原因を、国家のパワー分布変動から考察する。※八月刊行予定。
- ▼今村壽博／十亀昭人『建築手帖』(八四〇円)。建築のコンセプト、図面、模型、プレゼンテーションなど、建築を学ぶうえでの基礎知識を、実例を織り交ぜながら丁寧に解説する。建築学生の必携「手帖」。※八月刊行予定。

名古屋大学出版会

三重大学出版会

- ▼富谷至著『文書行政の漢帝国—木簡・竹簡の時代』(八八二〇円)木簡・竹簡こそが最強の帝国を実現した。簡牘の特性から文書行政の実態を蘇らせる。
- ▼金井雄一他編『世界経済の歴史—グローバル経済史入門』(二九四〇円)最新の成果により、欧米・アジアなど世界各地域の発展過程をバランスよく解説。

- ▼古池保雄監修『基礎からの睡眠医学』(二九九〇円)現代の「国民病」睡眠障害の臨床に必須の睡眠医学。その基礎知識から症状・診断・治療までを解説。
- ▼高木秀夫著『量子論に基づく無機化学—群論からのアプローチ』(四八三〇円)分子の構造や反応の成否は、いかにして決まるのか。まったく新しい教科書。

- ▼福井康雄監修『宇宙史を物理学で読み解く—素粒子から物質・生命まで』(三六七五円)ビッグバンに始まる一三七億年の歴史を、最新の研究に基づき語る。
- ▼谷田一三・村上哲生編『ダム湖・ダム河川の生態系と管理—日本における特性・動態・評価』(五八八〇円)陸水生態学・土木工学等を総合した視点から、環境影響の全容に迫る初の成書。

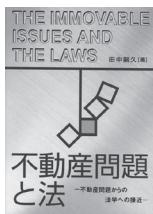
- ▼『アメリカ先住民の日々』E.C.Parsons編、神徳昭甫訳。四六判・五三五頁、定価二四五円。第2版。

- 第一章 ○煙管運び—クロウ族の戦士○海狸の女—クロウ族の女○シャーマンの方にて○揺れる花○ゴロゴロ翼の雷電力○タルサのトルキ 第四章○アパッチ族の細長き女○宝石商ジョンの治癒○ズニ族のワイヤウティツア○ズニ族の光景○ハバスパイ族の往時○土の舌 第五章○テペカーノ族の祭司長○テスカトボリトカの代役○ホロン・チャンの戴冠式○トルテカ族の建築技師 第六章○貝塚人のウイクシイ○クラマス川は紛争続き○ヌートカ族の商人 第七章○ウインディゴ○鮭を欲しがって泣く女 第八章○イスイットの冬
- ▼『宇和海まき網の経済』田中皓正著、A5判・一六六頁(定価二九四〇円)
不漁・恐慌・統制経済、漁師は助け合つてしのいで来た。

京都大学学術出版会



▼『西洋古典学事典』松原國師著（A4判上製・一七二二頁・二九四〇円）見出し語数五六〇〇余、各國語表記、収録系図五三五点、各項目に詳細な出典箇所を示し、古代の人々の生活の世界を活写する。ギリシア・ローマの専門家だけでなく、西洋史・哲学・文学・ローマ法、政治、宗教の研究者さらには劇作家、美術家、エッセイスト等の芸術諸分野など、西洋世界のルーツに関心を向けるさまざまなお読者のニーズに応えるわが国初の本格的な事典。



▼『不動産問題と法——不動産問題からの法学への接近』田中嗣久（一五七五円）不動産には各種の権利が交錯し、そして衝突し、法学上の対立を惹起する。本書は、近年多くの裁判例が蓄積されている不動産に係わる諸問題を取り上げ、その検討を通して法学の問題を考える。

▼『太陽地球系科学』地球電磁気・地球惑星圏学会・学校教育ワーキンググループ編（菊判上製・三〇六頁・三五七〇円）太陽活動と地球圏の諸現象を統一的に捉え、そのメカニズムを知ることで、環境問題から情報通信・宇宙開発まで、幅広い課題に答える。

大阪経済法科大学出版部

大阪大学出版会

今回は既刊書の紹介をします。

▼『刑事弁護士が語る裁判員裁判——ナニワの法廷から』村下博・山口健一・岩村等編集（一五七五円）大阪弁護士会所属の九名の弁護士によるリレー形式の公開講座の内容を編集。実際の弁護活動を具体的に例証し、刑事案件の検査や裁判の問題点を提示する。



▼寺前直人著『武器と弥生社会』（A5判・三四八頁・五七七五円）繩文の伝統が弥生の多様な武器を生んだ。弥生時代開始期における武器普及の低調さと中期における北部九州社会と畿内社会の違いを提起し、日本列島に到来した最初の武器と人の関係を解き明かす。▼志水宏吉監修『教育社会学への招待』（A5判・二七八頁・二五二〇円）教職を目指す学生に、教育の営みを社会の大きな枠組みの中で捉え返す思考法を教える。学力低下・不登校・逸脱行為など現実の教育課題を題材に、学校の事実や意見を社会学的にとらえ、人権や社会的公正の視点を前に出す。▼小林快次・江口太郎『巨大絶滅動物マチカネワニ化石—恐竜時代を生き延びた日本のワニたち』（A4判・九六頁・二五二〇円）日本にも昔、ワニがいた。初めての日本ワニ化石発見は大阪大学の構内からほぼ全身の化石骨が出土した巨大なマチカネワニ。この最新の研究から明らかになつた現生ワニたちの関係や、かつての姿、分析について、豊富なカラー図版とともに解説。

関西大学出版部

関西学院大学出版会

九州大学出版会

▼吉田栄司著『憲法的責任追及制論Ⅰ』

(A5判・四七二五円) 憲法上の諸制度を「責任」追及制として把握し直し、憲法解釈論にそれを反映させようとする斬新な憲法論文集。

▼岩井 浩著『雇用・失業指標と不安定就業の研究』(A5判三一五〇円)

現代の雇用不安を解明する雇用・失業指標と失業の代替指標の研究。失業代替指標論の具体的適用(日本のU指標等)と失業・不安定就業の変動をさらに分析。

▼浜本隆志編著『異界が口を開けるとき』

(A5判・三四六五円) 世界の祭りの中に継承されてきた来訪神信仰の構造を包括的に考察し、それらの本質的意義の消滅と現代社会の病根との繋がりを指摘。

▼小幡 育他共著『微生物の不思議な力』

(A5判・二五二〇円) 地球上に三五億年前から生き続けてきた微生物の不思議な力、驚きの多種多様な機能(健康食品・医薬品・エネルギー・環境浄化等)を紹介したユニークな著書。

新刊

▼加藤 雄士著

『経営に活かす人材開発実務—NLPを活用した人材開発』

(A5並製・四〇八頁・定価三一五〇円)

▼上田 耕治著

『企業内容開示の動向』

(A5上製・二四六頁・定価三三六〇円)

▼陣内 正敬・森本 郁代・阿部 美恵子・笛井 香・竹口 智之著

『時事外文語で日本理解—大学からの超級力タカラ語』

(A5並製・九四頁・定価八四〇円)

▼平野 哲司・土江 伸誉・今西 明・K. G. りぶれつとNO. 26

『心理科学の最前線』

(A5並製・一二四頁・定価九四五円)

▼亀田 啓悟編著

『総合政策のニューフロンティア—公共性への多面的アプローチ』

(A5並製・二九〇頁・定価二五二〇円)

▼細川亮一『道化師ツアラトウストラの黙示録』(A5判・六五一〇円)ニーチェ

『ツアラトウストラはこう語った』を「形象が織りなす一つの物語」として捉え、新しいツアラトウストラ像を提示する。

第一回 九州大学出版会・学術図書刊行助成対象作。

▼高田健次郎『原子核構造論におけるボソン写像法』(A5判・三七八〇円)原

子核構造を解明するうえで強力な方法であるボソン写像法について、その基礎から応用までを平易かつ明確に解説する。

▼矢田俊文『地域主権の時代をリードする北九州市立大学改革物語』(四六判・二三一〇円)現役の学長による、法人化後の大学改革の実践例の報告。

▼東アジア地域連携シリーズ・全5巻

国吉澄夫・張季風編『1 広がる東アジアの産業連携』。大野俊編『2 メディア

文化と相互イメージ形成』。柳哲雄・植

田和弘『3 東アジアの越境環境問題』。

福田晋編『4 東アジアにおける食を考える』。小川全夫編『5 老いる東アジアへの取り組み』。日中韓国際シンポジウムの成果。(四六判・各一八九〇円)

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】 2010年7月31日現在

- 株式会社朝日新聞社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
亞細亞印刷株式会社 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社 〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷 〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社 〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・ジャパン株式会社 〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス
城島印刷株式会社 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会 〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス東京 〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
港北出版印刷株式会社 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社 〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太平洋社 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
土山印刷株式会社 〒601-8308 京都府京都市南区吉祥院向田東町14
宗教法人天然寺 〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい 〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
萩原印刷株式会社 〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂 〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 6F
株式会社平文社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
株式会社ベル製本 〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
宗教法人法界寺 〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所 〒335-0034 埼玉県戸田市笛目3-11-5
株式会社毎日新聞社 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
株式会社ライトコミュニケーションズ 〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社 〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

- 岩波書店 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
吉川弘文館 〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-8
みすず書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
未来社 〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2

一般社団法人大学出版部協会 加盟出版部一覧

北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

東北大出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大出版会
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畠120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局

〒140-0002 品川区東品川1-32-5
TEL 03-5479-7265 FAX 03-5479-8277

産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

専修大学出版局

〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階
TEL 044-911-7179 FAX 044-911-1382

大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2666 FAX 03-5477-2747

東京農工大学出版会

〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内
TEL 0423-67-6700 FAX 0423-67-6700

法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-7164 FAX 045-786-9898

東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69番地 京大吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウェストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172